



Title	北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2012 : 年次記録 : 安心して暮らせる社会づくり
Issue Date	2017-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/65270">http://hdl.handle.net/2115/65270</a>
Type	report
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	chapter-2.pdf ()



[Instructions for use](#)

## 2. 開催行事のウェブサイト

## 電動カート DE 北大散策 グリーン電力を利用した移動手段に関する実証研究



## 行事予定

開催日時	2012年9月1日(土)～11月30日(金) (終了しました)
主催者	北海道大学 環境科学院 IFES-GCOE プログラム 環境教育研究交流推進室
共催	北海道グリーン購入ネットワーク
会場	北海道大学 札幌キャンパス内
言語：日本語	対象：一般市民
行事概要	バリアフリーな移動手段&心通う会話を提供する電動カートが北海道大学のキャンパス内に登場します。ドライバーは環境を学ぶ学生です！将来的には、環境科学院のソーラーパネルが生むグリーン電力を使い、雪深い冬も運行することを目指し、本年は基礎的実証研究を行います。北大にお越しの際は、ぜひご乗車ください。
北海道大学側の実施責任者	北海道大学 環境科学院 IFES-GCOE プログラム 環境教育研究交流推進室 吉村暢彦
事前申し込み	不要 (路上で声をかけてください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 環境教育研究交流推進室 吉村 暢彦 Tel: 011-706-3355 E-mail: ynobu14001[at]ees.hokudai.ac.jp
URL	<a href="http://reo.ees.hokudai.ac.jp/">http://reo.ees.hokudai.ac.jp/</a>

## 実施報告

サステナビリティ・ウィーク期間中、持続可能な社会づくりのための実験場である本学キャンパスを活用し、敷地内交通の低炭素化に向けた実験を行いました。学内交通の目的を、観光、教職員などの学内移動、配達業務の3つに分けて、それぞれを電動のカート（LCC：Low Carbon Cart）で運行することができるかを検討しました。

観光においては、正門横のインフォメーションセンター・エルムから博物館に行く観光客を運びました。約400名程の方にご乗車いただきました。LCCの動力が電動であることから、太陽光や風力発電等エネルギーのことをお話することも多く、環境コミュニケーションの生まれる空間となりました。スピードも10km程度での走行だった為、景色を眺めるのに調度良かったようです。

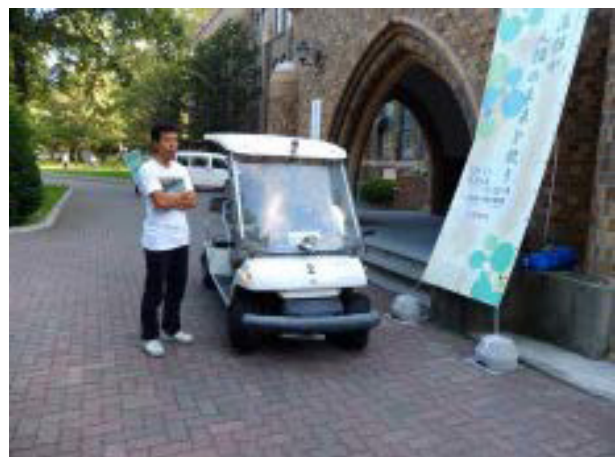
学内移動については、学内循環バスのバス停付近等でお声かけするなどして、約70名程の方に実験に参加して頂きました。目的地まで小回りが利くからよい、冬のこれから走ってほしいといった声が聞かれるなど、バスとの補間性を発揮できる可能性も示唆されました。配達業務については、現在北大生協さんやフジゼロックスさんにもご協力頂きデータを取得しているところです。

今年は、悪天候の日が多く、太陽光パネルでのバッテリーが充電が困難な日が続きましたが、11月に入り天候が回復したため、太陽光パネルでのバッテリー充電を行い、グリーン電力100%で走行実験を行うこともできました。

LCCは、中古のゴルフカートを改造したものです。新しい技術を導入するだけでなく、既存の技術を組み合わせて、新しい機能を社会に提案することも環境科学院の研究として行っていきたいと思っています。



イチョウ並木を走行する LCC



ドライバー：中西浩崇（環境科学院 修士2年）

フィンランド - 日本 共同シンポジウムシリーズ  
 北方圏の環境研究に関するシンポジウム2012



## 行事予定

開催日時	2012年9月10日(月) - 9月14日(金) (終了しました)
主催者	オウル大学、ラップランド大学、北海道大学、フィンランドセンター
会場	オウル大学、オウランカ研究所 (ともにフィンランド)
言語 英語	対象 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>昨年は北海道大学で、今年はフィンランドでシンポジウムを開催します。気候変動と世界の経済動向によって急速に変化している北方圏の環境を対象とした共同研究と、それを将来的に支える若手研究者の育成について、最新の成果を共有します。また、北方圏に関わる多分野の研究者が研究協力を発展させていくための計画を共に議論します。</p>
北海道大学側の実施責任者	北海道大学 国際本部
事前申し込み	不要 (直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	<p>北海道大学 国際本部          国際企画担当          Tel: 011-706-8025          Fax: 011-706-8036          E-mail: global[at]joia.hokua.ac.jp</p>
URL	<a href="http://thule.oulu.fi/englanti/studies/NERS2012prog.html">http://thule.oulu.fi/englanti/studies/NERS2012prog.html</a>

## 実施報告

9月に入り最も寒い朝に、5日間にわたる第5回フィンランドー日本ジョイントシンポジウムがフィンランド・オウル市で開幕しました。

オープニングセレモニーはオウル大学の Lauri Lajunen 校長の挨拶で始まりました。挨拶の中で、オウル大学は特に環境テクノロジーの分野で顕著な業績を挙げている事が強調されると共に、北海道大学とオウル大学間で環境に特化したジョイント・マスター・プログラムが近い将来始まるよう強い期待が示されました。

次に北海道大学本堂武夫副学長が、北海道大学が学生の留学を強く後押ししていることの一例として、シンポジウムの1週間前、北海道大学の学生16名がヘルシンキ大学とラップランド大学を訪れた、ファースト・ステップ・プログラムを紹介しました。

又、本堂副学長は、フィンランドと日本は同じ巨大な隣人、ロシアとの良好な関係を築く事がきわめて重要であると提起しました。

ラップランド大学の Minna Uotila 副学長は、北海道大学の学生がファースト・ステップ・プログラムで同大学を訪れた事、また、今後も交換留学プログラムを歓迎すると述べました。さらに、社会福祉と北極圏の課題に関し共同研究の活性化を促したいとの事でした。

日本フィンランド協会の Laitinen 代表は、北海道とフィンランドが特別でしかも長い付き合いがあることを強調しました。また、フィンランド協会の今年の研究課題が「高等教育」「地域研究」「建築とデザイン」であることを紹介しました。

フィンランド日本教育協会 Heikki Makipaas 理事長による「北方圏の自然環境に関するフィンランドと日本の協力」と題するプレゼンテーションで、シンポジウム・セッションが始まりました。彼の主たるメッセージは、私たちは子どもたちの為に「持続可能な社会」を構築する責任があり、そのような社会を創る上で、この種の研究集会は重要だということでした。また、「北極圏大学」への加入はパートナー大学を互いに訪れるよい機会が得られることにも言及しました。また Heikki Makipaas 理事長は、使用されていない研究施設がたくさんあることを指摘しました。例えば、網走のすばらしい海洋研究センターはフィンランドの研究者に開放されているが、だれもその機会を使用したことがないとの事です。

その後も参加者の間で様々な対話が昼食や休憩の間も続けられ、新しいアイデアを産みだしているように見受けられました。全ての参加者は、このシンポジウムが将来も続くことを望んでおり、来年は札幌での開催が期待されています。



シンポジウムの様子



オウランカ研究所前にて



## 行事予定

開催日時	2012年9月13日(木)～14日(金) 12:30受付開始、13:00 開講 (終了しました)
主催者	サステナビリティ学教育研究センター (CENSUS)
共催	インドネシア科学院(インドネシア)
会場	NOVOTEL HOTEL (インドネシア ボゴール市)
言語 英語	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>2011年11月南アフリカのダーバンにて国連気候変動枠組条約第17回締約国会議 (COP17) が行われました。そこで、現行の京都議定書を2013年以降も延長し (延長期間は未定)、2015年までに新しい法的枠組み作りを目指しています。</p> <p>日本は京都議定書の延長に反対し、独自の国際枠組みの設立を目指しており、今後の日本の環境の取り組みが世界から注目されています。特に、アジア各国との二国間合意による新市場メカニズムの構築に向けた政策が一段と重要になっています。</p> <p>政策にあたっては生態や社会経済シミュレーションやモデリングと組み合わせて策定・実施する必要があるため今回は、国内外からシミュレーションやモデリング、そして、環境施策の専門家を招へいし、活発</p>

な議論を期待しています。そして、この議論を COP18 等に提案していきます。特に今回はインドネシアの熱帯泥炭地における持続可能な環境マネージメントに焦点をあて、環境政策とモデリングに関する議論を深めていきたいと考えています。

北海道大学側の実施責任者 北海道大学農学研究院 教授 大崎満

事前申し込み 不要

参加費 無料

問い合わせ先 地球規模課題国際協力事業（SATREPS）「インドネシアの泥炭・森林における火災と炭素管理システム」プロジェクト事務局

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目北海道大学  
サステナビリティ学教育研究センター  
TEL：011-706-4586 FAX：011-706-4534  
E-mail：jj-admin[at]census.hokudai.ac.jp

URL <http://www.census.hokudai.ac.jp/html/JSTJICA/jp/index.html>



## 実施報告

地球規模課題対応国際協力事業（SATREPS）の採択課題の一つである「インドネシアの泥炭・森林における火災と炭素管理」プロジェクト（2008年北海道大学採択）における国際シンポジウムの一環として本シンポジウムを共同開催致しました。

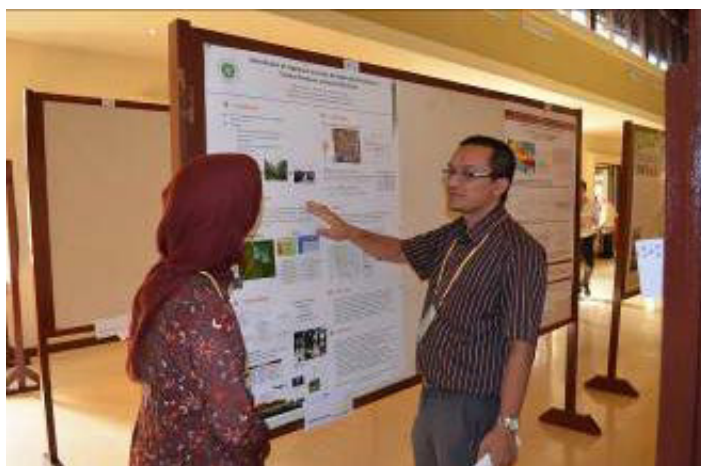
本企画は、インドネシアの熱帯泥炭地における持続可能な環境マネジメントに焦点をあて、環境政策とモデリングに関する議論を深めることを目的としています。特に、昨今の地球の温暖化問題におけるインドネシアを取り巻く状況は世界的にも大変注目を浴びています。熱帯生態系に対する国際的な関心が気候変動への適応策と緩和策及び生物多様性の観点から大変重要とされているため、本企画の「環境・生態に関する施策と環境評価モデリング」に対して、参加者から大変な興味と関心が寄せられました。特に、特別講演として国際湿地保全連合（Wetlands International）から Nyoman Suryadiputra 氏が *Sustainable Developments on Peatland Areas*（熱帯泥炭地における持続可能な開発）に関する発表を、日本大学の小林紀之先生から *International Movement of Carbon Credit*（カーボンクレジットの国際的動向）に関する発表を、国立環境研究所の大石様亀井様より *GOSAT, GOSAT-2, and Regional Carbon Flux Estimation*（GOSAT\*, GOSAT2 と地域的なカーボンフラックス評価）に関する貴重なご講演を頂き活発な議論を行う事ができました。

また、この度は本学の学生2名を本シンポジウムに派遣することができました。海外での発表に加え、海外の多くの研究者と議論を重ねることができたことは、彼らの今後の研究活動において大変有意義なものになったことは言うまでもありません。また、こうした活動は、研究面においても大変重要な位置づけとなっています。サステナビリティ学教育研究センターは、今後も学生の人材育成に力をいれ、学生への発表の機会を今後も形成していきたいと考えています。

\*温室効果ガス観測技術衛星「いぶき」



参加者集合写真





ポスターセッションの様子

## 本当は歯じゃない歯痛のはなし



## 行事予定

開催日時	2012年9月15日(土) 9:00 受付開始 10:00 開講 (終了しました)	
主催者	北海道大学 歯学研究科	
共催	北海道大学歯学会	
会場	北海道大学 歯学部講堂	
言語 英語	対象 専門家・一般市民・大学生・院生	
行事概要	<p>歯痛は虫歯や歯周病、根の膿み、噛み合わせ、破折、知覚過敏などによる日常生活で起こりうる痛みの問題です。</p> <p>これは一般歯科医院での治療で容易に治るでしょう。しかしまれに、歯自体は全く健康なのに、患者さんはその歯が痛いと訴えることがあります。この場合、問題ないので治療に入ることができず、また疑われる問題の治療を行ったとしても症状は改善せず、原因不明と扱われ、場合によってはその歯は抜かれてしまっているのが現状です。</p>	
		<p>今回このワークショップでは、そういう原因不明の歯痛について、現在までわかっていることを国際的に著名な研究者を招待して勉強することを目的として開催いたします。また、矯正治療や親知らずの抜歯、手術等を行った時に残る知覚、異常や疼痛、麻痺違和感などを、これらが起こる原因と、それに対する治療方法、治癒の経過についても実際の症例から得られた情報をみなさんに紹介し、知識を深めます。</p> <p>本ワークショップは、専門家による英語日本語の同時通訳(ヘッドセット)がつきます。歯科医師等専門家のみならず、一般市民の方々とも話し合うことを目的として、専門知識がなくても理解できるように説明いたします。</p>

## プログラム

10:00- Neural disturbance in oral and maxillofacial region. Dr.Kazuhiro Mastusita, HU

10:45- Physiological background during the neuro damage. Prof. Peter Svemsson, Aarhus University

11:30-14:30 Lunch break

13:00- What is Atypical odontalgia? Dr.Kazuki Okada, HU

13:45- Atypical odontalgia -review from a Clinical Oral Physiologist. Prof.Lene Baad-Hansen Aarhus University

14:30- Unique characteristics of the masseter muscle in patients with Jaw Deformity. Prof. Yoshimasa Kitagawa, HU.

15:10- Discussion and closing the workshop

北海道大学側の実施責任者 北海道大学大学院歯学研究科 助教 有馬太郎

事前申し込み 必要：9月13日必着(ウェブ、電子メール、FAX、葉書)

参加費 無料

問い合わせ先

### 【申し込み先】

次の事項を記入の上、所定の宛先に申し込みください。

(1) 件名に、「9月15日開催 “本当は歯じゃない歯痛のはなし” に申し込みます」と記載ください。

(2) 参加希望者すべて氏名、住所の市町村名、職業

(3) 代表者の連絡先 (電子メールもしくは電話番号)

\* 電子メール：tar[at]den.hokudai.ac.jp([at] を@に変えてください)

\* FAX :011- 706 - 4276

\* 葉書：(郵便番号060-0813) 札幌市北区北13条西7丁目 北海道大学 歯学研究科 口腔医学専攻 口腔機能学講座 有馬太郎 気付

### 【問い合わせ先】

北海道大学 歯学研究科 有馬太郎

TEL 011-706-4275

E-mail:tar[at]den.hokudai.ac.jp

## 実施報告

平成24年9月15日、晴天のもと歯学部講堂にて「本当は歯じゃない歯痛のはなし」講演会を開催いたしました。歯学研究科からサステナビリティウィークへの企画提案は今回で3回目となり、現在まで顎関節症診断方法、痛みについてのサイエンスを紹介してきました。今年は「歯痛のようで、歯痛ではない痛み」について、つまり患者さん自身は「歯が痛い」と訴えているのにも関わらず原因が歯ではない痛みについてのお話でした。講師は本学歯学研究科から3名でした。また海外からはデンマーク、オーフス大学より2名お招きし、本表題についてそれぞれの臨床経験と研究、過去に行われた研究結果についてのご紹介と、それぞれのトピックについて活発に討論いたしました。

まずは午前の部では、口腔内の手術に伴う神経の損傷について臨床の症例報告を主体としたご講演を松下和裕 助教より頂きました。続いて臨床口腔生理学分野教授の Peter Svensson 先生に顎顔面領域の神経損傷と診断方法、治療方法と治癒経過についてわかりやすく解説いただきました。

午後の部に入り、いよいよ本題の非定型歯痛について、岡田 和樹 助教より概念と臨床症例報告を紹介して頂きました。その後同じく臨床口腔生理学分野准教授の Lene Baad-Hansen 先生に非定型歯痛について、定義や発生メカニズム等をご講演いただきました。最後に北川義政教授に、顔面神経麻痺や顎欠損と咀嚼筋運動能力の変化についてご講演いただきました。全講演終了後に講師先生方と聴衆との間でディスカッションが行われ、それぞれが臨床、もしくは一般生活の中で困ったことや問題について質問が出、それに対して全員の中から知識を寄せて話し合い、有意義でした。

参加者は一般人と教員、大学院を含めて37人（うち日本人学生5人、留学生2人）で、毎年のことではありますが「よかった」と言ってくださったかたがほとんどで、数名の方から「英語でなくてもよいのでは？」というご意見を頂きました。総じて大成功のイベントとなりました。これもすべてサステナビリティウィーク事務局と歯学研究科の皆様のあたたかいご支援、そして少数ではありますが興味を持って毎年ご参加して下さる一般市民の方々のおかげであります。大変感謝しております。また来年度も一般市民の方が興味を持って下さるような企画を出して行きたいと思っております。



講演の様子



聴講の様子



## 専門型 公開講座：持続可能な社会と生物時計

### 行事予定

開催日時	2012年9月15日(土)-16日(日) 8:30 受付開始、9:00 開講 (終了しました)
主催者	第19回日本時間生物学会学術大会
共催	北海道大学 医学研究科 時間医学講座
会場	北海道大学学術交流会館 大講堂
言語：日本語・英語 対象：専門家・大学生・院生	
行事概要	<p>生物時計は、バクテリアからヒトまで、すべての生物がもつ、約24時間のリズムを作り出すメカニズムです。昼夜変化に応じた活動リズムを示すのも、日長を感受して繁殖・冬眠・渡りなどの季節変化を発揮するのも生物時計の機能です。周期的な環境に適応する生物物時計研究は、「時間」をキーワードに持続可能な社会実現に多くのヒントを与えます。</p> <p>本シンポジウムでは、昼夜や餌の量に応じて活動時間帯を変化させる脳と体の各臓器の時計の違い、環境温が変化しても24時間のリズム周期が変わらない分子メカニズム、光や温度変化を伝えて活動時間を最適化するメカニズムなどの講演を通じて、サステナブルな社会実現を目指します。</p>
<h3>プログラム</h3>	
<h4>9月15日</h4> <ul style="list-style-type: none"> <li>講演9:00 R. シルバー (コロンビア大)</li> <li>シンポジウム 10:00 「ほ乳類中枢時計」</li> <li>14:00 「末梢時計の臓器特異性」: ほ乳類の生物時計を中心に午前は脳の中枢時計の環境への同調やリズム発振、午後は全身の末梢時計が摂食や社会活動に体のリズムを合わせる機構の講演を行う。</li> </ul>	
<h4>9月16日</h4> <ul style="list-style-type: none"> <li>特別講演 9:00 C. ジョンソン, (バンダービルト大)</li> <li>シンポジウム 10:00 「周期決定機構」</li> <li>14:00 「生物時計と時を刻む分子」細胞リズム発振メカニズムと生物の生存戦略についての講演を行う。環境適応戦略としての生物時計と持続可能な社会への生物時計の応用について学ぶ。</li> </ul>	

北海道大学側の実施責任者	北海道大学医学研究科 特任教授 本間さと
事前申し込み	不要 (直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	医学研究科 時間医学 中村さやか TEL : 011-706-4737, FAX : 011-706-4737 E-mail : physiolo[at]med.hokudai.ac.jp
URL	<a href="http://www.ec-pro.co.jp/19jsc/index.html">http://www.ec-pro.co.jp/19jsc/index.html</a>

## 実施報告

9月15日には、コロンビア大学教授 R.Silver 博士による特別講演「脳内中枢時計における環境情報の時間的統合」と2つのシンポジウム「ほ乳類中枢時計視交叉上核の謎にせまる」と「末梢臓器振動体の臓器特異性、同調、相互作用」が開催されました。Silver 博士は季節による日長変動や環境照度の変化が、ホルモンの変動を介して動物の行動量と行動リズムに影響するメカニズムを、鳥類と齧歯類を例に解説しました。また、齧歯類の中枢時計のイメージング研究成果を数理的にクラスター解析し、様々な遺伝子障害による影響をグラフィック表示しました。シンポジウムでは、午前は中枢時計の環境照度、温度による調節や時計遺伝子機能を、午後は、摂食時間や食事内容により、臓器の時計が遺伝子発現や生理機能のリズムを変化させるメカニズムについて討議されました。両シンポジウムを通じ、生物が体内の時計機構を用いて、個体レベルでエネルギー効率を最適化すること、生物時計が個体や種の持続可能性のために重要な機能をもつことが明らかに示されました。9月16日は、バンダービルト大学の C.Johnson 博士によるシアノバクテリアの生物時計の分子機構に関する特別講演と2つのシンポジウムが開催されました。Johnson 博士は、地球上で約24時間周期の生物時計を発達させた生物が繁栄するに至った経過を、試験管内で異なる周期のシアノバクテリア変異体の競合実験によって明らかにしています。シンポジウム「周期決定機構」では、約24時間という生物時計の周期が決定されるメカニズムを、「生物時計と時を刻む分子」では、24時間周期のリズム発振のための細胞内タンパク修飾のメカニズムについての発表がありました。いずれの講演でも、地球の自転による24時間の明暗サイクル、公転による日長や気温の季節変動に応じて、生物が活動量、活動時間、摂食パターンなどを選択し、繁殖や渡り、冬眠、回遊などを行う環境適応戦略として、生物時計がサステナビリティに重要な働きをもつことを確認させられました。



PhD. Rae Silver



PhD. Carl Hirschie Johnson

## 国際シンポジウム：アフリカにおけるサステナビリティ学の展開



## 行事予定

開催日時	2012年9月18日(火) 9:00受付開始、9:30開演 (終了しました)
主催者	北海道大学サステナビリティ学教育研究センター (CENSUS)
共催	国際水環境工学研究所 (2iE)
会場	国際水環境工学研究所(アフリカ・ブルキナファソ国, Salle Raibaud à la Fondation 2iE) 住所: Ouagadougou, rue de la Science, 01 BP 594 Ouagadougou 01, Burkina Faso.



言語: 英語 対象: 専門家・大学生・院生

## 行事概要

北海道大学サステナビリティ学教育研究センターが主導する高度人材教育プログラム「持続社会構築環境リーダー・マイスター育成」では、アジアとアフリカの高等教育機関と共同で、地域の持続性問題の解決のために率先してとりくむ若きリーダーの育成を行っています。人材育成の核となる教育は、文理融合の視点からあらゆる学問分野のかきねを超えて現実社会の問題解決を目指す「サステナビリティ学」を置き、協力機関で教育プログラムを共同で作成し、共有してきました。今回は、アフリカのブルキナファソという国の協力機関である国際水環境工学研究所において、途上国におけるサステナビリティ学の現在と展望について、先進国である日本、中進国の台湾と中国、そして途上国のブルキナファソとインドネシアから、それぞれの視点に基づき議論を行います。サステナビリティ学全体の概況のほか、エネルギー、住宅、気候変動、水などの各問題を取り上げます。

シンポジウムのプログラムは [こちら](#)



北海道大学側の実施責任者	北海道大学 サステナビリティ学教育研究センター 教授 田中教幸
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学サステナビリティ学教育研究センター (CENSUS) 田中晋吾 TEL: 011-706-4530 電子メール: jimu[at]census.hokudai.ac.jp
URL	<a href="http://www.census.hokudai.ac.jp/">http://www.census.hokudai.ac.jp/</a>



## 実施報告

戦略的環境リーダー育成拠点事業の一環として毎年実施している国際シンポジウムをアフリカ・ブルキナファソ共和国にある2iE(国際水環境工学研究所)で開催しました。2iEの副学長マイガ教授の開会の挨拶の後、日本・北海道大学、台湾・成功大学、インドネシア・パランカラヤ大学、インドネシア・ガジャマダ大学、中国・浙江大学、ブルキナファソ・2iEの代表者により持続的発展のための教育と研究に関連する14の発表がありました。本シンポジウムでは特にアフリカの持続的発展に必要な人材の育成、アフリカの環境に適した科学技術の応用に関しての活発な議論が行われました。今後の共同教育プログラムの展開とインターネットによる講義の共有、共同研究に推進をするための情報共有を十分行う事ができました。来年度は中国浙江大学での国際シンポジウムの開催することで、合意が得られました。また、フィールド研修プログラム実施の可能性をアフリカまたは中国で検討することとなりました。

シンポジウムのプログラムは  [こちら](#)



講演の様子



講演者との集合写真

市民セミナー 安心した暮らしと在宅ケアを支える



行事予定

開催日時	2012年9月18日(火) 12:00 受付開始、13:00 開演・開講 (終了しました)
主催者	大学院保健科学研究所
共催	第27回生体・生理工学シンポジウム、計測自動制御学会
会場	学術交流会館 第1会議室
言語:日本語	対象: 一般市民・大学生・院生

行事概要

急速に高齢化が進む日本では、日常生活の中で健康を維持管理できることが重要です。また、看護・介護が必要になっても在宅で安心な生活できれば、病院ベッド数の不足を解消するとともに、「自宅で最期を迎えたい」という国民意識にも適います。本セミナーは、在宅を中心に安心した暮らしを支えるための健康科学・技術に関する紹介です。



## プログラム

---

### 明日の安心のための生活情報計測技術

富山大学大学院理工学研究部 生命・情報・システム学域  
ヒューマン・生命情報システム学系 教授 中島 一樹

### 安心した暮らしを支える看護工学

大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻 ロボティクス&デザイン  
看工融合共同研究講座 特任教授 山田 憲嗣

### 安心できる褥瘡予防用具

北海道大学大学院情報科学研究科 生命人間情報科学専攻  
生体システム工学講座 准教授 高橋 誠

### 在宅看護の実践 - 安心した暮らしと在宅ケアを支えるために

北海道大学大学院保健科学研究院 創成看護学分野  
教授 進藤ゆかり

---

北海道大学側の実施責任者 北海道大学大学院保健科学研究院 傳田健三

事前申し込み 不要(直接会場へお越しください)

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学大学院保健科学研究院  
医学系事務部保健科学研究院事務課  
Tel: 011-706-3315  
E-mail: shomu[at]hs.hokudai.ac.jp

---

URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp/>

## 実施報告

在宅を中心に安心した暮らしを支えるための健康科学・技術を紹介するイベントとして市民セミナーを開催しました。共催した学会から招いた2名の講師と、学内と研究院からの2名の講師には、生体計測技術、看護工学、褥瘡のバイオメカニクス、在宅看護といった専門分野の技術が在宅ケアや安心した暮らしを支える様子を話していただきました。また、参加者の理解がより深まることを目的に、在宅ケアの現状と社会資源に関する短い講義が講演に先立って行われました。

参加者は学外 23名、学内 12名でした。平日昼間のセミナーとしては多くの方々が参加しました。特に、他大学の学生や教員は多数参加しており、市民に開かれた北大と保健科学研究院を実感できたことでしょう。夏休み期間だったこともあり北大学生は参加していませんでした。

講演毎の質疑では適確な質問が続いたため、セミナーは予定時間を30分以上超過して終了しました。さらに、参加者からのアンケートでは広報の充実などの問題点が指摘されました。これらはセミナー運営における問題点です。その一方で、これらはセミナーへの関心の高さと、今後のセミナー開催への期待を反映していると考えています。

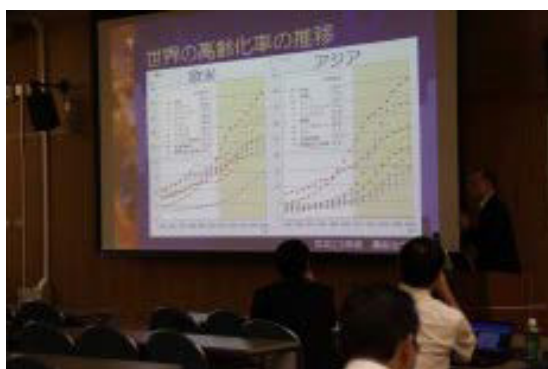
保健科学・健康科学は一般の方からの関心が高い分野というだけでなく、急速に進む高齢化社会を支える重要な分野です。保健科学研究院は、市民セミナーなどを通じて、広く情報発信に務めていきます。

### アーカイブ映像

講演の様子が映像にてご覧いただけます。

リンク > [北海道大学オープンコースウェア](#) >> [「サステナビリティ・ウィーク」](#)

>>> [「安心した暮らしと在宅ケアを支える」](#)





## 行事予定

開催日時	2012年10月6日(土) 20:30- (終了しました)
主催者	北海道大学 国際本部
会場	YouTube で配信 ( <a href="http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv">http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv</a> )
言語: 英語(通訳なし)	対象: 一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>ひとり一人が安心して暮らせる持続可能な社会を実現させるために、世界の重要課題に挑んでいる北海道大学の研究者4人が、研究の意義や面白さを、インターネットを通じて熱く語ります。そして、共に課題解決に取り組んでくれる若い仲間を募ります。Youtubeを観ながらTwitterやFacebookを通じて、英語で会場とコミュニケーションしましょう。</p> <p>▼10月6日のインターネット配信サイト  <a href="http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv">http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv</a></p> <p>▼昨年の GiFT の様子がご覧いただけます。  <a href="http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/GiFT">http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/GiFT</a></p>
北海道大学側の実施責任者	サステナビリティ・ウィーク実行委員長本堂武夫(北海道大学理事・副学長)
参加費	無料
問い合わせ先	<p>北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局(国際本部内)</p> <p>Tel: 011-706-8031</p> <p>Fax: 011-706-8036</p> <p>E-mail: <a href="mailto:sw1[at]oia.hokudai.ac.jp">sw1[at]oia.hokudai.ac.jp</a></p>



## 実施報告

サステナビリティ・ウィークの5周年記念として2011年に誕生したインターネット・フォーラム「GiFT」は、4月にオープンしたばかりの本学附属図書館メディアコートから世界に向けて生放送をしました。

GiFTとは、Global Issues Forum for Tomorrow の頭文字を取ったものです。これは、持続可能な社会の実現を阻んでいる世界規模の課題を解決しようと励む人が集う機会を提供するインターネット上のイベントです。特に、これから専門分野を決めて本格的に研究を開始しようとする学士課程や修士課程の学生に対し、最新の研究成果を紹介し、世界の課題の解決のために研究を共にしようと呼びかける機会でもあります。

今年は、「安心した暮らし -A Future Society Offering Peace of Mind for All」をテーマに、北海道大学の4人の若手研究者が、水、病気、食料、ジェンダーの観点から、最新の研究成果と共に、課題解決の展望を各自15分間、英語で講演しました。

生中継は約100名が視聴し、GiFT終了後から閲覧可能となったアーカイブ動画は、日本はもちろん世界各地から11月30日までに1,068回視聴され多くの関心を集めています。

### ▼GiFT ウェブサイト

<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/>

### 【講演者と講演タイトル】

- 山田朋人 工学研究院 “Along with Water” (意訳：水とともに生きる)
- 秋田英万 薬学研究院 “Have Drug, Will Travel: Using Nano Technology in Human Health Care” (意訳：『くすり』よ届け。健康に寄与するナノテクノロジー)
- 菅野優香 文学研究科 “Queer Culture in Japan” (意訳：日本のクィア・カルチャー)
- 石村学志 サステナビリティ学教育研究センター “There is nothing we can do for March 11.” (意訳：3.11、そして北大の役割 — 気仙沼漁業復興)

GiFT誕生の背景には、2つの環境変化があります。ひとつに動画サイトの急速な普及、そして、サステナブル・キャンパス活動の本格化です。世界の若者に本学のサステナビリティ研究を伝えつつも、移動に伴う二酸化炭素排出量を最小限に抑える手法としてインターネットを活用したフォーラムが生まれました。



本学副学長による冒頭の挨拶



会場の様子：秋田英万准教授による講演

## 北大カフェプロジェクト：サステナビリティ・カフェ

## 行事予定

開催日時	2012年10月6日(土) - 7日(日) (終了しました)	
主催者	北大カフェプロジェクト	
後援	北大元気プロジェクト 2012	
会場	学術交流会館前	
	言語：日本語(通訳なし)	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>コミュニケーションスペースとしてのカフェです。意見交換やくつろぎの場としてご利用ください。飲み物の代金は設定せず、募金という形でお気持ちをいただいております。</p> <p>カフェのそばには、パブリック・ビューイングできるスペースがあり、国際サステナ対話(International Dialogue for a Sustainable Future)を楽しむことができます。</p> <p>◆オープン時間◆</p> <p>10/6(土) 10:30-16:00</p> <p>10/7(日) 11:00-16:00</p>	
北海道大学側の実施責任者	代表・久保田早穂(北海道大学経済学部2年)	
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)	
参加費	設定なし(募金)	
問い合わせ先	北大カフェプロジェクト 久保田早穂 E-mail: hokcafe[at]gmail.com	
URL	<a href="http://hokcafe.web.fc2.com/">http://hokcafe.web.fc2.com/</a>	

## 実施報告

「サステナビリティ」をテーマにしたコミュニケーション・スペースの創出を目的に、札幌キャンパス内で最も人通りの多い学术交流会館前にカフェを2日間開設しました。同日に開催されたホームカミングデー2012を訪れた同窓生をはじめ、学生、市民、観光客の方など総勢200人に無料で飲み物を提供し、会話を楽しむことができました。

北大カフェ・プロジェクトは活動を開始して6年になり、これまでに39回、主に北大構内で、季節に合わせてカフェや、他のイベントとのコラボレーションカフェを開催してきました。今年は初めてサステナビリティ・ウィークへ参加し、これをきっかけに「サステナビリティなカフェ」とはどのようなものかを考える機会となりました。そして、今回は初めて間伐材を使用した紙コップを使用したり、マイカップの持参を呼びかけました。私たち北大カフェプロジェクトは、これからも人と人をつなぐカフェづくりを目指します。同時に、今回の「サステナ・カフェ」とどまらず、今後もサステナビリティな活動に目を向け、カフェという領域で可能な取り組みを積極的に行っていきたいと考えています。



カフェプロジェクトのメンバー



カフェでの交流の様子





## 24 時間 国際サステナ対話 -SW2012 記念イベント

## 行事予定

開催日時	2012年10月6日(土)正午～7日(日)正午 (終了しました)
主催者	北海道大学
会場	ウェブサイト上 @YouTube ( <a href="http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv">http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv</a> )
言語: 英語	対象: 一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>サステナビリティ・ウィーク 2012 の開会を記念して、国際サステナ対話「<a href="#">International Dialogue for a Sustainable Future</a>」を、ウェブサイト上で開催します。</p> <p><b>国際サステナ対話／IDSF って何?</b></p> <p>IDSFは、世界の学生、研究者そして市民が、新たな発見と視点を共有することで持続可能な社会の実現に向けた包括的な視野を獲得すると共に、横のつながりを広げていく機会です。</p> <p><b>何するの?</b></p> <p>10月6日(土)正午から7日(日)正午にかけ、持続性の課題に関する新たな科学的知識や大学の取り組みの動画をインターネット上に24時間発信すると同時に、世界中の参加者による対話の場もインターネット上に提供します。</p> <p>昨年人気を博したGiFTの生中継もあります。</p> <p><b>私は参加できるの?</b></p> <p>当日まで、ほぼ毎日 Facebook でサステナビリティの話題を提供していますので、覗いてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Facebook: <a href="http://www.facebook.com/SW.Hokkaido.u">http://www.facebook.com/SW.Hokkaido.u</a></li> </ul> <p>当日は、YouTube をご覧ください。そして、感想や質問をFacebookやTwitterを通じて送ってください。サステナビリティのコミュニティーを広げていきましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>YouTube: <a href="http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv">http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv</a></li> <li>Twitter: <a href="https://twitter.com/husw2012">@husw2012</a></li> </ul>

## IDSFのミッションは

知識そのものの発展と社会の変革を促進する触媒としての役割を果たしていきます。

北海道大学側の実施責任者 北海道大学 国際本部 武村理雪

事前申し込み 不要

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局(国際本部内)  
TEL 011-706-8031  
FAX 011-706-8036  
E-mail sw1[at]oia.hokudai.ac.jp

## 実施報告

サステナビリティ・ウィーク2012のオープニングイベントとして、「24時間国際サステナ対話」と題し、持続可能な社会づくりに取り組む本学の今を、インターネットを通じて英語で世界に発信しました。これは、学生がレポーターとなり、札幌キャンパス内外の様々な場所や人を尋ね、本学の歴史や持続可能な社会の実現に向けた研究、学生の生活などを中継し、YouTubeとUstreamを通じインターネット配信する企画です。

学生レポーターは10月6日に開催された諸々の行事会場を訪れ、サステナビリティ・ウィーク公式ロゴをデザインした山口聡一氏を招き行った授賞式、第1回ホームカミングデー、サステナ・カフェの様子を中継しました。また、省エネ技術の研究に取り組む留学生と日本人学生を取材し、その研究の意義と可能性を紹介しました。サステナビリティ学研究センターが提供する授業を受講した留学生は、レポーターとして当センターを訪れ、担当教員への取材を通じて、センターが提供する教育プログラムの魅力をアピールしました。総合博物館を訪問し、普段見る事ができない貴重な資料庫から中継し、資料の管理・保管の大切さと共に、本学の総合博物館が担っている重要な役割を伝えました。その他にも、ポプラ並木やモデルバーン、時計台など本学の歴史とアイデンティティが感じられる場所から中継を行うと共に、イチョウ並木や中央ローンなど美しいキャンパスを世界に映像発信しました。

これらの映像はYoutube上にアーカイブしており、誰でもいつでも視聴できることから今後、留学先を検討している世界中の学生が、本学の魅力を知るための絶好の媒体となると期待されます。

Youtubeチャンネル：<http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv>

## 【学生レポーター】

- David Blanco (工学研究科)
- Mohammad Mamun (工学研究科)
- Evdon Sicat (工学院)
- Mohammad Shariful Islam (環境科学院)
- John Kalenga (経済学研究院)
- Nzelu Chukwunonso Onyemaechi (獣医学研究院)
- Kevin Earl Sherman (農学院)
- Omar R. Salinas Villafane (工学院)
- Mariko Toda (農学部)



サステナビリティ・ウィークの公式ロゴをデザインした山口さん取材する2人の学生レポーター



持続可能な社会のインフラ基盤となり得る熱交換システムを研究する学生を取材する様子



## 行事予定

開催日時	2012年10月6日(土) (終了しました)
主催者	北海道大学
会場	附属図書館 本館 メディアコート
言語:英語	対象:一般市民・大学生・院生
北海道大学側の実施責任者	国際本部長 本堂武夫
問い合わせ先	サステナビリティ・ウィーク事務局(国際本部内) TEL:011-706-8031 FAX:011-706-8036 E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp

## 実施報告

世界の学生の持続可能な社会の実現への関心を高めようとサステナビリティの課題について熱く議論する「サステナ・学生フォーラム」を開催しました。これは北海道大学の学生が持続可能な社会の実現をはばむ課題について議論する様子をインターネットで公開することにより世界の学生に考えるきっかけを提供するものです。このフォーラムの様子はライブ配信されると共に、Youtube上にアーカイブして誰でもいつでも視聴できるようになっています。

Youtube チャンネル: <http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv>



フォーラムでは5つのテーマについて約20分ずつ自由に議論を行いました。

### 【討論テーマ】

1. What is your opinion on feeding a growing population? (増加する人口の養い方について、あなたは考えを聞かせてください)
2. How do you feel about nuclear energy? (原子力エネルギーについて、あなたはどのように考えますか)
3. What are you doing to reduce waste? (ごみ削減の為に、あなたは何をしていますか)
4. How can you make our campus more sustainable? (サステイナブルなキャンパスを実現する為に、あなたは何かできるとおもいますか)
5. Do you think economic development and sustainability can co-exist? (経済成長とサステナビリティは共存し得ると、あなたは思いますか)

討論者として参加した7人の学生はそれぞれのテーマについて知識と経験を総動員して英語で議論しました。中国、バングラディッシュ、セルビア、エリトリアからの留学生4名と留学経験をもつ日本人学生による議論は、理想と現実の両面をふまえた、多様な持続可能な社会のイメージや実現の手法を露呈しました。

討論に参加した学生からは「様々な文化や学問分野の人との議論は刺激的でよい学びの機会」「対話により新しい見解を得ることができた」「英語で討論をする勉強になった」という意見がありました。

サステナビリティ・ウィーク事務局は、将来の社会を担う学生が自らの考えを発し、他の考えを受けとめる機会をサステナビリティ・ウィークの中で確保していきたいと考えています。



【討論者】

Afona chernet / アフォナ チェルネット (医学研究科)

Biljana Novkovic / ノヴコヴィチビリャナ (環境科学院)

Erii Sugawara / 菅原絵梨衣 (経済学部)

Hiroaki Odawara / 小俵大明 (経済学部)

Jumpei Haruta / 春田 淳平 (法学部)

Nazrul Islam / ナズルル イスラム (農学院)

Ye QIAN / イェチェン (工学院)

## 国際シンポジウム：かわりゆくアジアの山岳環境



## 行事予定

開催日時	2012年10月7日(日)～9日(火) 9:00 受付、9:30 開講 (終了しました)
主催者	北海道大学、ネパール・トリブバン大学、GLP札幌拠点オフィス
後援	在ネパール日本国大使館, 北海道大学 IFES-GCOE , National Centre of Competence in Research (NCCR North-South) South Asia Regional Office
会場	Hotel Himalaya, Kupondole Height, Lalitpur, Kathmandu (ネパール)
言語: 英語	対象: 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>このシンポジウムでは、アジアの山岳地域に焦点をあてて、(1) 陸域システムの脆弱性、回復力、持続可能性と(2) 山地災害、氷河湖決壊洪水、気候変化と適応、観光と生業、生物多様性、自然環境保全などの山岳環境の変化について議論を行います。このシンポジウムは、北海道大学と、北海道大学に設置されている全球陸域プロジェクト(GLP)札幌拠点オフィス、ネパール・トリブバン大学とが共同で実施するもので、サステナビリティ・ウィークの行事を海外で実施する初の試みです。</p> <p>シンポジウムの様子は Ustream にてライブ配信します。  時間: 2012年10月7日(日) 12:15～(日本時間)</p>

北海道大学側の実施責任者	北海道大学大学院 環境科学研究院 教授 渡辺悌二
事前申し込み	必要
参加費	学生・大学院生と一般参加者は無料、発表希望者(学生・大学院生を除く)は登録料が必要になります
問い合わせ先	<p>【申し込み先】</p> <p>下記URLよりお申し込みください。</p> <p><a href="http://2012mountainsympo.org/">http://2012mountainsympo.org/</a></p> <p>【問い合わせ先】</p> <p>GLP札幌拠点オフィス</p> <p>国際シンポジウム担当</p> <p>Fax: 011-706-3851</p> <p>E-mail: info[at]glp.hokudai.ac.jp</p>
URL	<a href="http://2012mountainsympo.org/">http://2012mountainsympo.org/</a>



## 実施報告

このシンポジウムは、北海道大学と、北海道大学に設置されている全球陸域プロジェクト (GLP) 札幌拠点オフィス、大学間交流協定校であるネパール・トリブバン大学とが共同で実施したもので、2000年に両校が実施した国際シンポジウムに続く2回目の国際シンポジウムでした。また、このシンポジウムは、サステナビリティ・ウィークの行事を海外で実施する初の試みの一つで、「2002年国際山岳年プラス10」ならびに国際的な研究推進の枠組みである「全球陸域プロジェクト (GLP)」に対する貢献の一つとして企画されたものでした。

このシンポジウムでは、アジアの山岳地域に焦点をあてて、(1) 陸域システムの脆弱性、回復力、持続可能性と(2) 山地災害、氷河湖決壊洪水、気候変化と適応、観光と生業、生物多様性、自然環境保全などの山岳環境の変化について議論を行いました。初日の10月7日は、ネパール環境科学技術省のケシャブ・マン・サキャ大臣、在ネパール日本国大使館の高橋邦夫大使らによる開会のスピーチではじまりました。全体では、トリブバン大学ならびに北海道大学の大学院生の発表(約20件)を含めた、3件のキーノート・スピーチ、46件の口頭発表、21件のポスター発表がありました。ほとんどの講演がUSTREAMを使ってインターネット配信されました。



会場の様子



柴田英昭教授(北方生物圏フィールド科学センター)



## 行事予定

開催日時	2012年10月12日(金) 10:00受付開始 10:30 開講 (終了しました)
主催者	北海道大学 教育学研究院
共催	高麗大学校, ソウル大学校, 北京師範大学
会場	北海道大学 学術交流会館 小講堂
言語:日本語・英語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生

## 行事概要

社会の進歩のために、専門家を輩出してきた高等教育は、現代社会を作り上げた知的原動力であったし、現在もおお知識基盤社会の駆動力である。しかし細分化した多様な個々の専門家達は、他分野との知の統合化を行ってきただろうか？現代の持続性の危機と共生社会への警鐘は、多彩な専門分野を制御する中枢機能を欠いた制御

不能の社会に依存している。多様化し、細分化し、専門化した知の統合化や構造化は、どのようにして可能であろうか？無秩序に拡大する知を人間は制御しうるだろうか？健全な持続性を保障するための知の統合化と、共生社会を可能にする教育および大学の役割とは何かを議論する。



## Program

司会 上原慎一(北海道大学大学院教育学研究院准教授)

10:30-10:35 開会の辞 室橋春充(北海道大学大学院教育学研究院教授)

10:35-11:25 ESDの発見と大学の役割 河口明人 北海道大学大学院教育学研究院・教授

11:25-12:10 現代教育の危機と共生主義教育論 韓龍震 高麗大学校教育学部・教授

12:10-13:30 昼食

13:30-14:15 持続可能性への能力ー脆い未来を見据えた教育 ヨハネス・チャプカソウル国立大学校教育学部・准教授

14:15-15:00 社会の持続的発展を支える健康教育の課題 水野真佐夫 北海道大学大学院教育学研究院・教授

15:00-15:45 中国学校校育における気候変動教育 Qing Tian (田青)北京師範大学環境教育センター・准教授

15:45-15:55 休憩

15:55-16:55 パネルディスカッション

コーディネーター 宮崎隆志(北海道大学大学院教育学研究院教授) / 河口明(北海道大学大学院教育学研究院教授)

パネリスト 韓龍震(高麗大学校教育学部教授)/ヨハネス・チャプカ(ソウル国立大学教育学部准教授)/水野真佐夫(北海道大学大学院教育学研究院教授)/チン・ティエン(北京師範大学環境教育センター准教授)

16:55 17:00 閉会の辞 河口明人(北海道大学大学院教育学研究院・教授)

---

北海道大学側の実施責任者 北海道大学大学院 教育学研究院 教授 河口明人

---

事前申し込み 必要 (FAX もしくはウェブサイトより 10/11までにお申し込みください)

---

参加費 無料

---

問い合わせ先 北海道大学・大学院教育学研究院  
国際交流委員会・河口明人  
Tel: 011-706-5421  
Fax: 011-706-4951  
E-mail: akitok[at]edu.hokudai.ac.jp

## 実施報告

本シンポジウムは昨年に引き続き、第二回ESD(Education for Sustainable Development)国際シンポジウムとして、現代が直面するグローバルな課題をとりあげ、人間社会とそれを取り巻く地球環境の健全な持続性のために、大学が果たすべき教育的役割について議論しました。北大教育学部が推進する双方向学生交換留学交流事業「ESDキャンパスアジアプロジェクト(学生のESD関連主題の学習と国際的人脈形成を支援する双方向性短期留学プログラム)」を共催する海外協定校(高麗大学校、ソウル大学校、北京師範大学)から教員を招へいし、それぞれの研究者の発表による情報交換と、それを土台にしたパネルディスカッションをおこないました。

シンポジウムでは、現代社会の危機の克服には、教育(ESD)が第一義的な役割を持っており、それを率先して良導する責任が大学にあることを確認しました。同時に、高度に専門化した現代世界の持続的生存環境の危機の原因が、まさに高度化する専門分化の過程そのもの潜在していること、したがってその初期形態としては近代の科学革命および産業革命期に形成された社会的構造に潜在していることを指摘し、その克服のためには、大学教育における俯瞰的能力の涵養に向けて教育構造の再構築の必要性を指摘しました。経済的個人主義や政治的自由主義など、相互に関連する強固な思想的傾向と、それに基づく人間の行動体系にささえられて分裂していく現代世界の歴史的な経過を振り返りながら、共生社会を展望するための教育的方法論について、克服すべき課題や理論的背景を議論しました。

現代世界の危機の克服には、社会生活様式の修正が必要であり、そのためには個々人の行動変容が必要です。したがって、その行動変容をもたらす原動力となるべきあらたなる道徳律が求められています。科学的世界を継承しつつも、西洋社会へのアンチテーゼとして、東アジアから発信する共生社会にむけたあらたな価値観の形成とその教育について、今後とも共同で取り組むことを確認しました。



講演者の集合写真

## 第4回 北海道大学 サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト



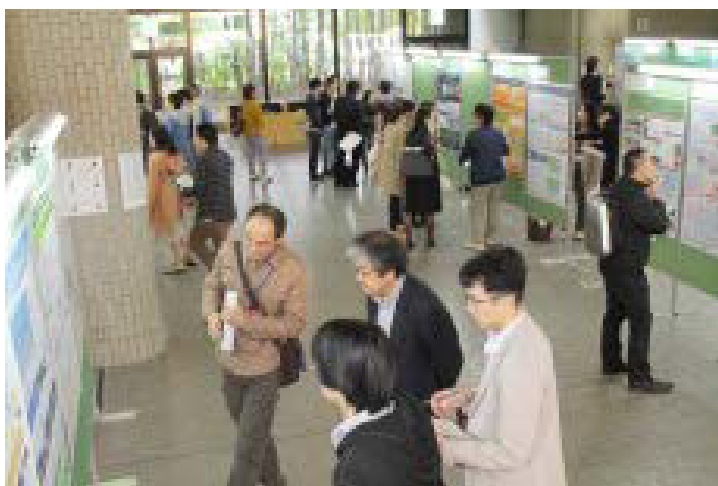
## 行事予定

開催日時	一般公開：10月13日(土)～21日(日) 正午-17:00 発表 & 審査：10月16日(火) 10:30 - 18:00 (終了しました)
主催者	北海道大学
会場	北海道大学 学術交流会館 ホール
言語	主に英語、日本語も若干あり 対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>北海道大学の学生が、自らの研究を「持続可能な社会づくりへの貢献」という観点で見つめ直し、ポスターにまとめ日本語もしくは英語で発表します。すべてのポスターは、2週間張り出されます。10月16日(水)には「コミュニケーション・タイム」が設定され、発表者がポスターの横に立って説明をし、来場者の質問に答えます。</p> <p>先輩や同期の学生が未来をどう描き、何を研究しているのか、そして研究ポスター発表とはどのようなものかを知る良い機会です。市民、企業の人事担当者、他大学の生徒など、どなたでもご来場いただけます。</p>
北海道大学側の実施責任者	北海道大学 理事・副学長 本堂武夫
事前申し込み	参観者は不要(直接会場へお越し下さい)。発表希望者は、9月20日までに申し込み要。
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 サステナビリティ・ウィーク事務局 (国際本部内) Tel: 011-706-8031 Fax: 011-706-8036 E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp
URL	<a href="http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp/students/">http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp/students/</a>

## 実施報告

サステナビリティ・ウィークの全学行事として定着しつつある「北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト」を、10月13日(土)～10月21日(日)の間、学術交流会館ホールにて開催しました。

本コンテストは、学生が今取り組んでいる研究を「持続可能な社会づくり」という観点から捉え直し、研究分野の異なる人に分かりやすく伝えるよう推奨するものです。「持続可能な社会づくり」という壮大な人類のミッションともいえるテーマと、自らの研究がどのようにリンクをしているのか、今一度考えてみようと、今年は73チーム(90名)の学生が参加しました。



アンケートからは、全学行事として定着しさらに発展していく事への期待と激励の声が寄せられました。

### <参加学生の声>

- 日本国内で英語発表をする機会がなかなか無いので、貴重な経験となった。
- 他分野の方から意見をもらえて有益だった。
- 分野外の方へ説明することの難しさを感じるとともにやりがいも感じた。
- 発表審査をすることで聴衆者の視点で発表について考えることができた。

### <審査員を務めた教員の声>

異分野の人に分かるように発表するのは、学生にとって良いトレーニングで教育的意味がある。

- 非常に興味深く発表を聴いた。
- 「異分野交流」により同分野の者では思いつかない発想が生まれることもある。
- 発表者、審査者、聴衆に、異分野交流の意義・目的を明確に伝えコンセンサスを持てるようにすることが必要だと思う。

「異分野の研究者による協働を促す機会」に加え、「世界に開かれた交流プラットフォーム」としての役割も担うコンテストとして、さらに発展していくことが期待されることから、今後は、協定校を中心に海外の学生の参加が可能となるような仕組みを作っていきたいと思います。

## 応募件数

---

合計78チーム(学生数90名)

1. 新たな社会の仕組み：10件
2. 健やかに人間らしく生きる：19件
3. 環境変化の緩和と適応：27件
4. 資源の適切な利用：22件

==== 大学院・学部別の応募人数 ====

学部生11人、修士課程の学生23人、博士課程の学生50人、その他1人

- 環境科学院:42人
- 保健科学院:12人
- 農学院:10人
- 国際広報メディア:4人
- 総合化学院:4人
- 工学院:3人
- 経済学研究科:1人
- 医学研究科:1人
- 文学研究院:1人
- 水産科学院:1人
- 経済学部:11人

### 審査について

---

10月16日(火)のコンテスト日には、発表者がポスターの脇に立ち、口頭説明を行いました。本コンテストの特徴は異分野研究者による審査です。異分野の研究者・研究者の卵に自らの研究の特徴・立ち位置・意義をいかに分かりやすく説明できたかが、審査されます。1枚のポスター発表につき、教員3名、学生3名の6名が審査をし、総得点378点でスコアを争いました。審査員は、全学から集まった86名の教員とポスター発表者ら87名の学生です。学会での発表とは異なり、専門用語が使えず、基礎知識が異なる6人の審査員にいかに説明をするかという事は、発表者にとって大きな挑戦となりました。

**募集要項** (審査の方法、審査の観点などが記入されています)

### 結果発表・授賞式

---

厳正なる審査により最優秀賞、優秀賞、特別賞が決定しました。10月22日(月)には、学術交流会館第1会議室にて授賞式を執り行い、佐伯浩総長より4チームに最優秀賞が授与され、本堂武夫理事・副学長より5チームに優秀賞、そして3チームに特別賞が授与されました。

厳正な審査の結果、4チームが「北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト」最優秀賞、5チームが優秀賞、そして3チームが特別賞となりました。



## 最優秀賞

満永 有美 (保健科学研究所)

ポスター番号: ② -4

タイトル: Assessment of the growth and nutritional status of children in Zambia

課題分野: ② 健やかに人間らしく生きる

藪原 佑樹 (農学院)

ポスター番号: ③ -7

タイトル: Understanding the status of riparian bird community in human-modified rivers in Japan.

課題分野: ③ 環境変化の緩和と適応

若槻 由加、菊池 裕介、荒川 竜太 (農学院)

ポスター番号: ④ -13

タイトル: Revegetation trial in limestone quarry with symbiotic fungi in Southwest Australia

課題分野: ④ 資源の適切な利用

前島 恵理子 (農学院)

ポスター番号: ④ -18

タイトル: The Challenge to Make Rice Plant Tolerant to Multistress in Acidic Soils

課題分野: ④ 資源の適切な利用

## 優秀賞

小西 信義 (文学研究院)

ポスター番号: ① -8

タイトル: Thinking of Better Lifestyle in Snowy Area: a proposal for the establishment of Wide-Area voluntary program of snow removal activity to support heavy snowfall communities.

課題分野: ① 新たな社会の仕組み



齋藤 彩乃 (保健科学研究院)

ポスター番号: ② -10

タイトル: The Difference Between Self-medication and Medical Consultation for the Elderly

課題分野: ② 健やかに人間らしく生きる

植松 遼平 (総合化学院)

ポスター番号: ② -15

タイトル: Systematic investigation into the mechanism of vinylogous Mannich-type reaction with 2-siloxyfuran using automated reaction path search methods

課題分野: ② 健やかに人間らしく生きる

山中 聡 (農学院)

ポスター番号: ③ -16

タイトル: Considering the sustainability of agriculture; conservation of bio-diversity in agricultural landscape

課題分野: ③ 環境変化の緩和と適応

山木 邦亮 (環境科学院)

ポスター番号: ③ -21

タイトル: Adsorption States and Reactivity of Nitrate and Nitric Oxide on Pd and Pd-based Binary Electrodes as Studied by Infrared Absorption Spectroscopy

課題分野: ③ 環境変化の緩和と適応

## 特別賞

---

木谷 祐希、三木 麻理子、安藤 裕樹、高橋 陽介、福島 良子 (経済学部)

ポスター番号: ① -10

タイトル: The pros and cons of nuclear power plant.

課題分野: ① 新たな社会の仕組み

三浦 裕紀 (環境科学院)

ポスター番号: ④ -7

タイトル: Green synthesis of benzaldehyde from benzyl alcohol with hydrogen peroxide over the solid catalyst consisted of the molecular oxide cluster

課題分野: ④ 資源の適切な利用

岡山 愛子、渡部雄大、勝田暁蕾 (経済学部)

ポスター番号: ④ -19

タイトル: Living together with nuclear electric power generation safely

課題分野: ④ 資源の適切な利用



## 行事予定

開催日時	2012年10月13日(12:30 受付、13:00 開講) 14日(9:30 受付、10:00 開講) (終了しました)
主催者	北海道大学 アイヌ・先住民研究センター
共催	北海道大学 観光学高等研究センター
後援	北海道教育委員会、札幌市教育委員会、札幌市
会場	学術交流会館 小講堂
言語	日本語・英語
対象	専門家・一般市民・大学生・院生

### 行事概要

昨今、文化遺産とそれを取り巻く地域社会との関係性が重要視されています。それは、「文化遺産」を育んできた集団や受け継いでいく地域社会と関わり合いながら保護されていくものであるという認識が広まってきているからです。このような見地から、先住民族の文化遺産保護のあり方にも注目が集まっています。

本シンポジウムでは、先住民族の文化遺産とその活用手段として注目されているツーリズムについて、1日目に考古学分野の専門家による基調講演、2日目に日本で先住民族文化遺産の保護・活用に取り組んでいる当事者による講演を予定しています。ここでは、アイヌ民族の立場からの講演も予定しています。本シンポジウムをとおして、文化遺産とそれに関わる人々のあり方、さらに地域社会における持続可能な文化遺産の保護・継承・活用のあり方を探っていきます。

### プログラム

当日のプログラムはこちら⇒ [プログラム日本語](#)、[Program English](#)

■2012年10月13日(土) 13:00～16:55(開場12:30)

[申込不要、参加費無料、同時通訳あり]

#### ◇基調講演

ティム・シャドラホール 教授 (ロンドン大学考古学研究所・パブリック考古学部門長)

「パブリック考古学の新しい展望」(仮題)

ジョー・ワトキンス 教授 (オクラホマ大学ネイティブアメリカンスタディーズ・プログラム長)

「挑戦としての先住民考古学」(仮題)

◇ストーリーテリング

結城 幸司 氏 (アイヌアートプロジェクト代表)

「七五郎沢の狐」(予定)

◇パネルディスカッション

司会:加藤 博文 教授(アイヌ・先住民研究センター)、  
山村 高淑 准教授(観光学高等研究センター)

■2012年10月14日(日) 10:00~16:50 (開場 9:30)

[申込不要、参加費無料、同時通訳あり]

◇セッション:パブリック考古学の可能性

座長: キャロル・エリック 講師(オクラホマ大学ネイティブアメリカンスタ  
ディーズ)

プロジェクトメンバーからの報告 1~4(各々20分程度)

◇セッション2:ヘリテージツーリズムの取り組み

座長:山村 高淑 准教授(観光学高等研究センター)

プロジェクトメンバーからの報告 1~5 (各々15分程度)

◇パネルディスカッション

司会: 山村 高淑 准教授(観光学高等研究センター)、  
高崎 優子(北海道大学大学院文学研究科博士課程)

■2012年10月15日(月) 10:00~12:00 終了予定

[要申込] 北大構内ヘリテージツアー

集合日時: 10月15日(月) 午前9時45分

集合場所:北海道大学 学術交流会館前

定員:15名(先着順に受付)

たくさんのお申込をいただき、誠にありがとうございました。

申込期間を過ぎましたので、受付を終了させていただきます。

ご了承くださいますようお願いいたします。

※2時間ほど北大構内を歩くツアーです。動きやすい服装でお越しください。

※参加いただけない方には、ご連絡いたします。

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

共催：北海道大学観光学高等研究センター

後援：札幌市、北海道教育委員会、札幌市教育委員会

北海道大学側の実施責任者	北海道大学 アイヌ・先住民研究センター教授 加藤博文
事前申し込み	13日(土)、14日(日)のシンポジウムについては不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	アイヌ・先住民研究センター 岡田真弓/OKADA Mayumi Tel: 011-706-2859 Fax: 011-706-2859 E-mail: m-okada[at]let.hokudai.ac.jp
URL	<a href="http://www.cais.hokudai.ac.jp/">http://www.cais.hokudai.ac.jp/</a>

## 実施報告

本シンポジウムは、先住民にかかわる文化遺産と、その活用手段として注目されているツーリズムをテーマに開催しました。

1日目の基調講演では、市民と考古学の協働を目指すパブリック考古学研究の先駆者であるロンドン大学のT.シャドラホール先生、ならびに先住民と考古学の関係について考える先住民考古学の開拓者であるオクラホマ大学のJ.ワトキンス先生に、それぞれ講演をして頂きました。その後、アイヌ民族のアーティストである結城氏にストーリーテリングを披露してもらいました。一日目の最後には、基調講演者、結城氏、シンポジウム企画者の計6名によるパネルディスカッションを行い、パブリック考古学と先住民考古学をめぐる課題や北海道におけるアイヌの文化遺産の今後について議論をしました。

2日目は、日本で先住民文化遺産の保護・活用に取り組んでいる当事者に講演をしていただきました。ここでは、実際に文化遺産の保護やツーリズムに取り組んでいるアイヌ民族の立場からの講演も行われました。最後に、実際にアイヌの文化遺産を活かしたツーリズムの現場で活躍されている講演者の方々と、観光学の研究者の計5名によるパネルディスカッションが行われました。

2日間のシンポジウムでは、北海道大学の学生・教職員だけでなく、市町村の関係者、一般の市民の方、そしてアイヌ民族、合計160名の方が参加してくださいました。参加者・聴衆からは、先住民政策、考古学、そしてツーリズムにかんする様々な質問やコメントを頂きました。本シンポジウムでは、これまで日本であまり馴染みのなかった、市民や先住民との協働を目指した文化遺産マネジメントについて、国内外の事例を多く参加者に紹介できた貴重な機会であったと思います。



講演の様子



パネルディスカッションの様子



講演者との集合写真



## 日中共同シンポジウム: 持続可能なサニテーションとリスク管理

### 行事予定

開催日時	2012年10月15日(月) 12:30 受付開始 13:00 開始 (終了しました)	
主催者	北海道大学 工学研究院	
共催	独立行政法人科学技術振興機構 (JST)	
会場	北海道大学 学術交流会館 第一会議室	
言語: 英語	対象: 専門家・大学生・院生	
行事概要	<p>「水を媒体とするすべての病気は貧困によって悪化し、さらに貧困の原因となる」といわれています。世界保健機関 (WHO) によれば、毎年約170万人の死が汚染された水に起因すると推定され、開発途上国では汚染された水により毎年8200万年分の健康寿命が失われていると推計されています。</p>  <p>本シンポジウムでは、JSTによる戦略的国際科学技術協力推進事業 (日本と中国) の成果をもとに、世界の水・衛生問題解決について議論を行います。</p>	
	<h3>Program</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>•Opening Session Welcome address by Prof. Naoyuki Funamizu (Faculty of Engineering, HU) Opening address by Prof. Xiaochang Wang (Xi'an University of Architecture &amp; Technology)</li> <li>•Session 1: Urine and its application (Chair: Mr.Charchalac Ochoa)</li> <li>•Session 2: Pathogen and Toxicity (Chair: Ms. Zhang)</li> <li>•Session 3: Gray &amp; Wastewater Treatment (Chair: Mr.Sene)</li> <li>•Session 4: Composting (Chair: Ms. Wu)</li> <li>•Session 5: Design (Chair: Mr. Yamauchi)</li> <li>•Closing, photo session</li> </ul> <p>For more details and abstract &gt;&gt;&gt; <a href="#">Here</a></p> <p>===== 北海道大学の学生へ =====</p> <p>工学部衛生環境工学コース「下水工学」の受講生は、当シンポジウムへの出席が必須です。</p>	

北海道大学側の実施責任者 北海道大学大学院 工学研究院 教授 船水尚行

事前申し込み 不要 (直接会場へお越し下さい)

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学 工学研究院 環境創生工学部門 サニテーション工学研究室  
細川 愛  
TEL: 011-706-6270  
E-mail: ubnwttrse[at]eng.hokudai.ac.jp

## 実施報告

独立行政法人科学技術推進機構 (JST) による戦略的国際科学技術協力推進事業 (日本と中国) の成果をもとに、世界の水・衛生問題解決について議論を行うことを目的に、日中共同シンポジウムを開催しました。共同研究先である中国の西安建築科技大学から王 曉昌教授と5名の学生が来日し、インターシップ研修生として同大学から本学工学研究科に滞在中の2名も合流しました。シンポジウムの参加者は主に本学の学生を中心に76名にのびりました。

シンポジウムは持続可能なサニテーションと環境・人間の健康に関するリスクの関係を議論することを目的としました。シンポジウムでは5つのセッション (尿の農業利用、病原微生物と毒性物質、雑排水再生、糞便の肥料化、システムのデザイン) を開催し、中国側から7件、日本側から9件の発表が英語で行われました。

本シンポジウムの特徴のひとつは、発表とシンポジウムの司会をすべて大学院学生が行うことにあります。英語で発表し、英語で質問に答えることは日本、中国の学生にとって簡単なことではありません。英語によるコミュニケーション能力を高めてもらおうとすることも本シンポジウムの目的の一つとしています。また、同じテーマで研究を行っている学生間の交流は、視野をひろげ、かつ、自分自身の研究の位置付けを知る良い機会ともなっています。

「水を媒体とするすべての病気は貧困によって悪化し、さらに貧困の原因となる」といわれています。世界保健機関 (WHO) によれば、毎年約170万人の死が汚染された水に起因するとされています。そして、開発途上国では汚染された水により毎年8200万年分の健康寿命が失われていると推計されています。本シンポジウムで取り上げている持続可能なサニテーション、ヒトの健康リスクの問題は世界的な課題です。これからもこのようなシンポジウムを開催し、世界で活躍できる人材を育てていく考えです。



シンポジウム参加者



プレゼンテーションの様子

## 第3回国際シンポジウム：東アジアの子どもの健康とサステナビリティ

—子どもたちを取りまく生活環境と健康問題—



## 行事予定

開催日時	2012年10月15日(月)、16日(火) 開講(15日) 13:30-17:00/(16日) 10:30-16:30 (終了しました)
主催者	北海道大学 環境健康科学研究教育センター
共催	北海道大学 教育学研究院、保健科学研究院、医学研究科
会場	(15日)北海道大学 学術交流会館 小講堂 (16日)北海道大学 百年記念会館
言語:日本語・英語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>肥満、生活習慣病、体力低下、アレルギーなど、ライフスタイルおよび生活環境に起因する子どもの健康問題が顕在化している。大規模な疫学研究が先行している欧米に比較して、日本そして東アジア地域においては各国における研究連携が十分であったとは言えない。また、東アジアの集団は遺伝的にも生活習慣も欧米人とは異なっている。本国際シンポジウムでは、日本をはじめ、中国、韓国、台湾といった東アジア地域の現状を紹介し、情報交換を行うとともに、子どもにとって健康で持続可能な社会の構築に向けて何をすればよいか議論する。</p>  <p>—————</p> <p>大学院共通講義「社会と健康」 受講の学生の皆様</p> <p>=====</p> <p>「社会と健康Ⅰ～パブリックヘルスとその関連科学～」、「社会と健康Ⅱ～疫学研究のデザインと実際～」、「社会と健康Ⅲ～環境と子どもの健康・発達～」受講者は、当シンポジウムへの出席が必須となります。</p> <p>=====</p> <p>子どもたちを取りまく生活環境と健康問題 10/15(月) 13:30-17:00</p> <p>司会：医学研究科特任教授・CEHS兼務教員 玉城 英彦 保健科学院教授・CEHS兼務教員 山内 太郎</p>



○プログラム

- ご挨拶：北海道大学理事・副学長 国際本部長 本堂武夫
1. 中国医科大学教授 Lihong Jia
  2. 教育学研究院教授・CEHS 兼務教員 松本 伊智朗
  3. CEHS 副センター長・特任教授 岸 玲子
  4. WHO Western Pacific Regional Office Dr. Mohd Nasir Hassan

健康で安心な社会構築への挑戦

10/16 (火) 10:30-16:30

司会：保健科学院教授・CEHS センター長 齋藤 健

教育学研究院教授・CEHS 兼務教員 河口 明人

○プログラム

< 第 1 部 > 環境要因と対策：化学物質と栄養

1. CEHS 特任講師 荒木 敦子
2. CEHS 学術研究員 宮下 ちひろ
3. 中国医科大学准教授 Ling-Ling Zhai

< 第 2 部 > 健康な社会への戦略

1. 順天堂大学医学部准教授 湯浅資之
2. 医学研究科特任教授・CEHS 兼務教員 玉城 英彦
3. 国際本部 松永龍児
4. WHO Western Pacific Regional Office Dr. Mohd Nasir Hassan
5. パネルディスカッション

- 順天堂大学医学部准教授 湯浅資之
- 医学研究科特任教授・CEHS 兼務教員 玉城 英彦
- 国際本部 松永龍児
- WHO Western Pacific Regional Office Dr. Mohd Nasir Hassan

北海道大学側の実施責任者 北海道大学 環境健康科学研究教育センター教授 岸玲子

事前申し込み 電話、E-mail, FAX もしくはウェブサイトから(当日受付も可)

参加費 無料

問い合わせ先 環境健康科学研究教育センター  
荒木、小松  
TEL: 011-706-4747, FAX: 011-706-4725  
info[at]cehs.hokudai.ac.jp

URL <http://www.cehs.hokudai.ac.jp/index.html>

## 実施報告

世界各国で生活環境に起因する子どもの健康と安全の問題が顕在化している現状を受け、特に東アジアの子どもの健康について議論する国際シンポジウム「東アジアの子どもの健康とサステナビリティ」を2日間に渡り開催しました。

第1日目(15日)には玉城英彦教授、山内太郎准教授の司会のもと、以下の講演をいただきました。(同時通訳つき)

1. 中国医科大学 Lihong Jia 教授「中国の学童の栄養と健康状態」
2. 韓国ソウル大学 Bungnyun Kim 教授「思春期のうつと自殺」
3. 北海道大学 教育学研究院 松本伊智朗教授「日本における子ども虐待の理解と論点」
4. 北海道大学 保健科学研究院 山内太郎准教授「フィールドワークで途上国の子どもの安全・健康・幸福に貢献する」
5. 環境健康科学研究教育センター岸玲子特任教授「日本における古くて新しい問題」

講演後はパネルディスカッションを行い、会場からのご質問も頂きながら、韓国のうつや日本の貧困と虐待の問題は相互の共通点が多く、互いの行政の取り組みの課題について活発な意見の交換が行われました。また、グローバルな経済発展が進むにつれて、その他の国々でも近い将来、中国や日本と同様に肥満や公害といった問題に直面する可能性があることなども示唆され、東アジア地域の子どもたちを取り巻く生活環境と健康に関する課題解決のための方策を話し合いました。

第2日目(16日・全編英語／通訳なし)の第一部では具体的な環境要因とその対策について、最近の調査研究から紹介をしました。特にKim教授からは急遽最新の脳画像も紹介しながらADHD研究について報告を受けることができました。

1. 北海道大学 環境健康科学研究教育センター荒木敦子特任講師「室内空気質と子どもの健康」
2. 北海道大学 環境健康科学研究教育センター宮下ちひろ学術研究員「胎児期PCB・ダイオキシン類曝露が児の健康に与える影響」
3. 中国医科大学 Lingling Zhai 准教授「思春期前の肥満男児の性的発育:4年間前向き研究」
4. 韓国ソウル大学 Bungnyun Kim 教授「環境曝露とADHD」

第二部では、「健康で安心な社会構築への挑戦」と題し、教育学研究院河口明人教授の司会で、これまでにアジア各国で展開されてきたヘルスプロモーションなどの医療協力や疫学研究について紹介しました。

1. 順天堂大学 湯浅資之准教授「グローバル化された世界における母子保健の新しい挑戦」
2. 医学研究科 玉城英彦准教授「スリランカにおける疫学研究」

3. 国際本部 松永龍児国際協力マネージャー「日本の保健政策 2011年～2015年」

4. 環境健康科学研究教育センター岸玲子特任教授

「環境健康科学研究教育センターとWHO コラボレーションセンター」

疫学研究など学術的な面から、行政的やJICAなどの実践的な異なる視点での国際的な活動を含めて、日中韓の三国の連携を深めることの重要性を再確認すると共に、環境健康科学研究教育センターが今後どのような役割を担うべきか議論しました。

イベントには大学院生や一般の方などのべ120人が参加し、終了後に実施したアンケートでは、年々規模が大きくなる当センター主催の国際シンポジウムへの期待を寄せるお声や、有意義な情報を得たという意見も多くみられ、講演者・参加者ともに実りあるシンポジウムであったことが伺えます。環境健康科学研究教育センターは、各種議論や参加頂いた方の意見を踏まえて、各機関と連携しながら、今後も子どもたちをとりまく環境や健康に関する課題に取り組んでいきます。



パネルディスカッションの様子



環境健康科学研究教育センター 岸玲子特任教授

## 産学官セミナー：理空間情報が拓く未来Ⅳ 防災 GISとハザードマップ



## 行事予定

開催日時	2012年10月17日(水) 12:30 受付、13:00 開講 (終了しました)
主催者	北海道大学 文学研究科
共催	地理情報システム学会北海道支部、北海道GIS・GPS研究会、NPO 法人Digital 北海道研究会
会場	北海道大学 学術交流会館 大講堂
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>2011年3月11日の東日本大震災から1年半が経ちました。この間に、国・自治体では津波防災体制の強化に向けて様々な取り組みを行ってきました。2012年3月には新しい地理空間情報活用推進基本計画が閣議決定され、その内容には、東日本大震災の教訓を生かして、高い防災力を持った高度情報活用社会を構築することが述べられております。この新しい基本計画では、地理空間情報の活用の中でハザードマップが重要であり、その作成を促進することが防災力を高める一つの手段となることが明記されています。そこで、今年度は、地震や津波などの災害に関する防災GISの活用とハザードマップ整備に関して、国、道、企業、住民、大学の立場から最新の取り組みについてお話しします。</p>
<p>The poster features a blue and white color scheme with a cityscape background. The main title '地理空間情報が拓く未来Ⅳ' is written vertically on the right. Below it, the subtitle '防災GISとハザードマップ' is also written vertically. The date '10月17日(水) 12:30-14:00' is prominently displayed in the center. The location '北海道大学 学術交流会館 大講堂' is listed below the date. The poster also includes a list of speakers and their affiliations at the bottom.</p>	

## プログラム

---

13:00～13:05 開会挨拶

13:05～13:45 特別講演: 東日本大震災を踏まえた北海道の防災対策

北海道総務部危機対策局 危機対策課防災グループ

主幹(地震・津波対策) 高見芳彦

東日本大震災を踏まえた北海道の防災対策について、北海道太平洋沿岸の新しい津波浸水想定などを用いて解説します。大地震や大津波発生時の自治体の役割、自助・共助・公助のあり方、道と自治体が連携して進めるハザードマップ整備などについてお話しします。

13:45～14:15 ハザードマップづくりのための国土地理院の情報とサービス

国土地理院 北海道地方測量部 部長 永山 透

ハザードマップづくりなど地域における防災の取り組みを支援する国土地理院の情報提供とサービスについて、提供中の各種地理空間情報の他、地理空間情報の利用手続きを容易にする北海道との協働や、最近提供を始めた数値地図(国土基本情報)、電子地形図 25000 などの新しい成果の概要を報告します。

14:15～14:45 3.11 東日本大震災後のハザードマップ作成と課題

株式会社シン技術コンサル 常務取締役 志村一夫

東日本大震災以後、津波防災を進める沿岸自治体は、津波ハザードマップ作成を住民との対話の中で進めています。今回は、いくつかの自治体を例にとり、このハザードマップ作成の現状を解説し、さらに、その課題についてお話しします。

14:45～15:15 地理空間情報を用いた町内会の防災活動

札幌市幌北第3町内会 会長 小川富之

Google Map を使った高齢者向けの疑似避難訓練や DIG(図上避難訓練)、地域住民との話し合いの中で作成するハザードマップなど、町内会での地理空間情報を用いた防災活動についてお話しします。また、これら行政からの情報の地域内共有や、町内会側から見た自助・共助・公助のあり方について検討します。

15:15～15:30 最新技術紹介

タブレット PC を用いた避難ナビゲーションシステムなど、地理空間情報や GIS による防災関連の最新技術を紹介します。

15:30～16:00 GISを用いた津波ハザードマップ作成のためのプロジェクト  
マネジメント手法

小樽商科大学社会情報学科 准教授 深田秀実

オープンソースのGISを用いた津波ハザードマップ作成マニュアルの活用  
事例に基づいて、自治体職員がハザードマップを自立的に作成できること  
を目指したプロジェクトマネジメント手法を紹介します。

16:00～16:30 津波防災におけるGISの活用

北海道大学大学院文学研究科 教授 橋本雄一

この企画の内容をまとめ、さらに北海道が発表した太平洋沿岸の新しい津  
波浸水想定などを用いた分析結果を加え、防災GISとハザードマップに関  
する成果と課題についてお話しします。

---

北海道大学側の実施責任者 北海道大学大学院文学研究科 橋本雄一

---

事前申し込み 不要(直接会場へお越しください)

---

参加費 無料

---

問い合わせ先 北海道大学 文学研究科  
橋本雄一  
Tel: 011-706-4019  
E-mail: you[at]let.hokudai.ac.jp

## 実施報告

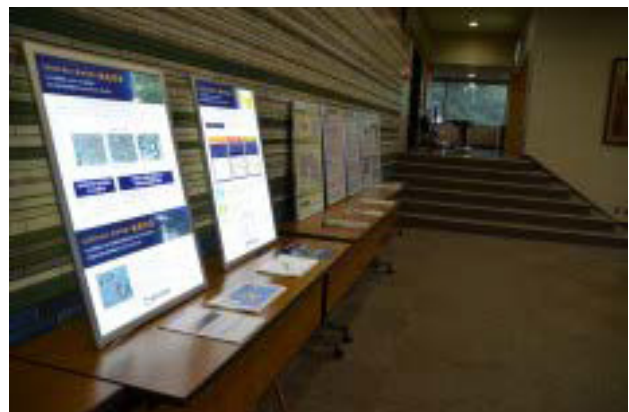
地理空間情報とは、持続可能な社会の構築するための道具として期待が高まっている社会的な情報基盤であり、これをGIS(地理情報システム)や衛星測位の技術とともに活用することで、効果的な防災を行うことが可能となります。本年度は、主に北海道の津波防災に焦点を当てて、地理空間情報の活用に関する最新の動向を、産学官民の立場から解説していただきました。

まず、特別講演として高見芳彦氏(北海道総務部危機対策局)が北海道の防災対策について、北海道太平洋沿岸の新しい津波浸水想定などを用いて解説しました。続いて、永山透氏(国土地理院北海道地方測量部)から地域防災の取り組みを支援するための国土地理院の情報提供について、志村一夫氏(株式会社シン技術コンサル)からハザードマップ作成に関する自治体の事例をお話していただきました。さらに、小川富之氏(札幌市幌北第3町内会)から地理空間情報を用いた町内会の防災活動について解説していただきました。

これらの発表を受けて、大学の立場から深田秀実氏(小樽商科大学社会情報学科)が自治体職員のためのハザードマップの自立的作成に関するプロジェクトマネジメント手法を紹介し、最後に企画責任者の橋本が企画の内容をまとめた上で、新しい太平洋沿岸の津波浸水想定などを用いた分析結果や、防災GISとハザードマップに関する成果と課題について話しました。当日は研究者、自治体職員、学生など180名以上の参加があり、またセミナーの内容が新聞2紙で記事として掲載されるなど、防災へのGIS活用についての関心の高さがうかがわれました。



会場の様子



会場外に置かれた展示物



## STAND UP TAKE ACTION in Hokudai

## 行事予定

開催日時	2012年10月17日(水) 18:00受付、18:30開講 (終了しました)	
主催者	北海道大学附属図書館(国連寄託図書館)	
会場	附属図書館 本館 メディアコート	
言語:	日本語	対象: 一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>貧困をなくすために「立ち上がる」世界的キャンペーン「STAND UP TAKE ACTION」を北大でも開催します。国連資料の利用ガイダンス、工学研究院・佐野大輔准教授によるミニ講演、学生による国際協力活動の事例報告を通して、世界の貧困解決のために何ができるのかを考えます。最後にみんなで立ち上がり、集合写真を撮影。イベントの様子は世界のリーダーたちに報告されます。世界の貧困解決のために立ち上がりましょう!</p> <div style="text-align: right;">  </div>	
	<h3>プログラム</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国連資料の利用ガイダンス</li> <li>・工学研究院・佐野大輔准教授によるミニ講演 「世界の貧困問題解決のために、あなたは何をイメージしますか」</li> <li>・事例報告1(農学部年・小林隆英さん) 「孤軍奮闘! フィリピンカミギン島におけるインターン」</li> <li>・事例報告2(国際協力学生団体「結~yui」) 「なにができるか、なにをするのか」</li> <li>・参加者全員でスタンド・アップ!</li> </ul> <p> <a href="#">チラシダウンロード</a></p>	
北海道大学側の実施責任者	附属図書館長・新田孝彦	
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)	
参加費	無料	
問い合わせ先	北海道大学附属図書館(国連寄託図書館) 千葉浩之 Tel: 011-706-3615 E-mail: ref[at]lib.hokudai.ac.jp	
URL	<a href="http://www.lib.hokudai.ac.jp/standup">http://www.lib.hokudai.ac.jp/standup</a>	



## 実施報告

附属図書館は、国連寄託図書館に指定されており、国連資料の所蔵・提供だけでなく、国連の広報活動にも協力しています。

10月17日(水) 18:30よりメディアコートにて「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」を開催しました。当イベントは「北海道大学サステナビリティ・ウィーク2012」の一行事であるとともに、世界の貧困解決と国連の「ミレニアム開発目標」達成を訴えて「立ち上がる」世界的なキャンペーン「STAND UP TAKE ACTION」への参加企画でもあります。

当日は雨の降るなか、学生、教職員、市民の方あわせて85名のみなさまにお集まりいただきました。最初に附属図書館より国連資料の利用ガイダンスを行った後、工学研究院の佐野大輔准教授に「世界の貧困問題解決のために、あなたは何をイメージしますか」という題でミニ講演をしていただきました。続いて、学生による国際協力活動の事例報告を行いました。まず、個人で活動した事例として、小林隆英さん(農学部4年)より「孤軍奮闘! フィリピンカミギン島におけるインターン」という題で報告がありました。次にグループで活動している事例として、国際協力学生団体「結~ yui」の吉川祐作さん(総合教育部1年)と岡泉佑奈さん(総合教育部1年)より「なにができるか、なにをするのか」という題で報告がありました。最後に新田孝彦附属図書館長の「スタンド・アップ!」の掛け声のもと、参加者全員で一斉に立ち上がり、世界から貧困をなくしたいという意志を示しました。

アンケートの回答には「自分も何か行動を起こそうと思った」、「国際協力活動をしているが、刺激になった」といった感想が寄せられました。このイベントをきっかけに、世界の貧困解決に向けて、行動を起こしていただければ幸いです。行動を起こすのにあたり、ぜひ図書館にある関連資料をご活用ください。世界の貧困や開発について考えるうえで、北大の先生たちのおすすめの本をブックログ( <http://booklog.jp/users/hokudai> )にて紹介しています。また、国連資料も世界の動きを知るうえで役に立つはずです。



なお、イベントに先立ち、9月24日(月)より10月17日(水)まで正面玄関ホールにて、パネル展示「Introduction to STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」を行いました。「ミレニアム開発目標」の解説や、世界の貧困や開発についての、北大の先生へのインタビューを掲示しました。パネル原稿はHUSCAPに収録していますので、次のURLからご覧ください。>> <http://hdl.handle.net/2115/50172>



学生、教職員、市民の方あわせて85名のみなさんと「スタンド・アップ」しました。遅い開催時間のうえ、雨の降るなかお集まりいただいたみなさま、どうもありがとうございました。このイベントをきっかけに、世界の貧困解決に向けて、新たに / さらに行動を起こしていただければ幸いです!!

## 北大×JICA 連携企画 持続可能な社会をつくる日本の海外

ボランティア ～青年海外協力隊の活動から見る国際協力の世界～



## 行事予定

開催日時	2012年10月18日(木) 18:00 受付、18:10～19:40 (終了しました)
主催者	JICA 北海道
共催	北海道大学 国際本部
会場	国際本部 大講義室(予定)
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	JICAのボランティアの基本は、現地の人々とともに生活し、働き、彼らと同じ言葉で話し、相互理解を図りながら、彼らの自助努力を促進するように活動すること。持続可能な社会の発展に貢献することを目指した草の根レベルのボランティアです。実際に途上国で活動していた青年海外協力隊のOB/OGを招き、彼らの活動報告を通して、現在の各国の様子を知り、国際協力とは何か、持続可能な社会の実現にはどうすればよいのかを共に考えていきます。
北海道大学側の実施責任者	国際本部 国際協力マネージャー・松永龍児 & シニア・コーディネーター / 講師・正木幹生
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	JICA 北海道 市民参加協力課 大倉 綾 TEL: 011-866-8421 Email: Okura-Aya[at]jica.go.jp
URL	<a href="http://www.jica.go.jp/sapporo/index.html">http://www.jica.go.jp/sapporo/index.html</a>

## 実施報告

国際協力とは何か、持続可能な社会（SD）の実現のために私たちはどうすればよいのか、青年海外協力隊の活動を通して考える機会を提供するJICAと北海道大学が連携し、本企画が実施されました。

今回は、ネパールに派遣された青年海外協力隊員に現地での活動について、同じくニジェールで青年海外協力隊として派遣されていた方に国際協力全般について講演していただきました。

参加者は、本学の学生、1年生から修士の学生に至るまでの24名と他7名の合計31名が参加しました。イベント終了後のアンケートでは、「国際協力に興味があるから」参加した方が多く（20名）、他にもJICAボランティアを含むボランティア全般に興味があるから参加した方も多かったようです。セミナーについては、アンケートに回答した全ての方から「大変良かった（8名）」あるいは「良かった（19名）」と好評でした。その理由としては、「JICAの仕組みや協力隊の制度を知ることができた」、「実際に活動していた現場体験を聞くことができた」、「理系の人でもボランティアできることを知れた」でした。

国際本部は、これまで以上にJICAと連携して、SDを考慮しつつ国際協力とは何か、また学生がそれにどのように関われるのか、を考える機会を提供して、具体的な行動につながるように推進していきます。



会場の様子

環境政策セミナー：再生可能エネルギーとグリーンエコノミー



行事予定

開催日時	2012年10月19日(金) 13:00 受付開始、13:30 開演 (終了しました)
主催者	北海道大学「持続可能な低炭素社会」づくりプロジェクト
共催	環境省北海道地方環境事務所
会場	北海道大学 学術交流会館 講堂
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要

「持続可能な北海道・日本・世界へ～再生可能エネルギーとグリーンエコノミー～」と題したこの環境政策セミナーでは、再生可能エネルギーに携わる研究者、実務家、国のRio+20担当者等による講演、対談を通じて、世界、日本の動きを概観しつつ、北海道各地のいままでの取組の成果と今後の再生可能エネルギーの利用促進を通じた持続可能な社会の達成に向けての課題を市民と共に考えます。



## プログラム

- 北海道大学大学院経済学研究科 吉田文和 教授  
「固定価格買取制度の完全実施と北海道における再生可能エネルギー」
- 日本政策投資銀行環境・CSR部 竹ヶ原啓介 部長  
「再生可能エネルギーのファイナンスと地域展開の可能性」
- NPO法人北海道グリーンファンド 鈴木亨 理事長  
「北海道における市民風車の取組」
- 境省地球環境局国際連携課 柴田泰邦 課長補佐  
「リオ+20の成果と日本が目指す方向性について」

北海道大学側の実施責任者 北海道大学大学院地球環境科学研究院 荒井真一 特任教授

事前申し込み 必要(電話、E-mail、FAX またはウェブサイトにて10/17までに申込みください)

参加費 無料

問い合わせ先 環境省北海道地方環境事務所 環境対策課  
細貝 拓也 /Takuya Hosogai  
TEL:011-299-1952, FAX:011-736-1234  
E-mail:reo-hokkaido[at]env.go.jp

## 実施報告

平成24年10月19日、北海道大学「環境政策セミナー：持続可能な低炭素社会」づくりプロジェクトと環境省北海道地方環境事務所の共催により、「持続可能な北海道・日本・世界へ～再生可能エネルギーとグリーンエコノミー～」が学術交流会館で、学内外から約140名が参加して開催されました。

まず北海道大学大学院経済学研究科 吉田文和 教授から、「固定価格買取制度の完全実施と北海道における再生可能エネルギー」と題し、7月から実施されている固定価格買取制度の概要や、風力、太陽光、バイオガス等道内の事業概要等について報告がありました。継続的な経営の困難さ、地元との連携・利益還元が不十分、買取枠・送電線の不足等の問題点があり、その解決と省エネ等によって民間投資を基礎に新しい産業と雇用を創出し、グリーン・エコノミーを推進することが重要であると強調されました。

次に、日本政策投資銀行環境・CSR部 竹ヶ原啓介 部長から、「再生可能エネルギーのファイナンスと地域展開の可能性」と題し、再生可能エネルギー事業におけるファイナンスの基本的な考え方と「地域での展開」について報告がありました。より多様な主体が参画し、それぞれがリスク・コストを分散する仕組みを追求すべきであり、地域金融機関の積極的な参画、標準化・モジュール化による文書化や法的な検討のためのコスト（リーガルコスト）の低減等が重要であると竹ヶ原部長は指摘しました。

NPO法人北海道グリーンファンド 鈴木亨 理事長から、「北海道における市民風車の取組」と題し、これまでの取組や再生可能エネルギー促進に向けた「[北海道エネルギーチェンジ100ロードマップ](#)」等の紹介がありました。また、今後の道内での普及に向けて、送電網等の強化、地域金融機関の参画、バードストライクや騒音・低周波音等の問題の解決と社会合意等が重要との指摘がありました。

最後に、環境省地球環境局国際連携課 柴田泰邦 課長補佐から、「リオ+20の成果と日本が目指す方向性について」と題し、6月にリオデジャネイロ（ブラジル）で開催された国連持続可能な開発会議（リオ+20）について、特に、本セミナーの主要テーマの「グリーン・エコノミー」に関する議論や日本の国際社会への貢献等についての報告がありました。

パネルディスカッションでは、再生可能エネルギーの導入目標の設定や送電網の強化等インフラ整備の重要性、また、ファイナンスを含め、いかに地域に利益を還元・循環させるかについて、一層の工夫が必要であることが議論されました。

参加者からは再生可能エネルギー促進に向けてファイナンスと地域活性化の重要性が参考になったという感想が寄せられました。



パネルディスカッションの様子



講演の様子



## 行事予定

開催日時	2012年10月20日(土) 13:00 受付開始、13:30 開講 (終了しました)
主催者	北海道大学 文学研究科 応用倫理研究教育センター
後援	札幌市、クイア学会
会場	北海道大学 学術交流会館 大講堂
言語:日本語・英語	対象: 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>現代日本のサブカルチャーは国内外で高い関心を持たれているが、そこに表れるジェンダー表象の特質を、ジャポニズム、女性表象、オタク文化におけるセクシュアリティといった視座から議論する。</p> <p>今日の多様性がよしとされる時代にあっても、私たちの性幻想は文化的な構築物であるジェンダーから容易に自由になれず、しばしば変更することが困難である。ならば、サブカルチャーという多様なジャンルとメディアにおいて現実的な性役割分担や性差別からどこまで自由に表現できるのか、あるいは困難なのか、抵抗の契機になるのか、ならないのかを問いながら、持続可能な性の多様性や平等性の実現について考える。</p> <p>サブカルチャーにおけるジェンダー表象の可能性と限界性を共有し、性をめぐる私たちの実存的な問いへと接続したい。</p> <p><b>プログラム</b></p> <p>講演1: シンガポール国立大学 デボラ・シャムーンさん  「『ベルサイユのばら』と1970年代における少女漫画の発展 (The Rose of Versailles and the Development of Shōjo Manga in the 1970s)」</p> <p>講演2: 英国マンチェスター大学 シャロン・キンセラさん  「コスプレ、女装子、女の子らしさに対するパロディー: 若年男性の間で競い合う女装という最新流行ファッションの変遷の探求 (Cross-play, josouko, and parodies of girliness: exploring the dynamics of new modes of transvestism amongst young men)」</p>





講演3: 札幌在住の漫画家・島本和彦さん

「男性読者の妄想と女性読者の妄想が会うとき:少年・少女漫画における  
異性表現 (When Male and Female Obsessions Meet in Reading:  
Heterosexual Representations in Shonen and Shojo Manga

全体ディスカッション

コーディネート: 本学文学研究科教授 押野武志教授

コメンテーター: 三橋順子さん

==== 北海道大学の学生のみなさん ====

後期の大学院共通授業「性差研究入門」を受講する学生は、当シンポジウムに必ず参加してください。



北海道大学側の実施責任者 北海道大学 応用倫理研究教育センター准教授 瀬名波栄潤

事前申し込み 不要 (直接会場へお越し下さい)

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学 文学研究科 応用倫理研究教育センター  
瀬名波栄潤  
june[at]let.hokudai.ac.jp

URL <http://ethics.let.hokudai.ac.jp/ja/events.html>

## 実施報告

本学文学研究科部局間交流協定校2校の教員と国内から2名の講師を招いて、ESD\*の一つ「持続可能な文化多様性」を論じる国際シンポジウム「異性装とパロディ」を開催しました。

今年で6回目を迎える本シンポジウムは、北海道大学第一期の中期目標・中期計画「ジェンダーに関する研究教育体制を構築する」を受け開講した大学院生のための共通授業科目「性差研究入門」のフィナーレを飾る催しとして、一般の方にも公開して行われたのが始まりです。2年前からは、ジェンダーに関する研究教育体制が文学研究科の「応用倫理研究教育センターをプラットフォームに行われることになり、昨年度からはサステナビリティ・ウィークの支援を受け、国際シンポジウムとして発展継続しています。

今回のシンポジウムは、現代日本のサブカルチャーを対象に国際シンポジウムを企画しました。海外でも注目を浴びる日本の「異性装文化」を軸に、文化表象及び文化受容の特質や歴史性、あるいは政治性を、ジェンダー・セクシュアリティの観点から批評的に捉え直す試みです。本企画の実現にあたっては、本学以外にも、札幌市とクイア学会から後援をいただきました。

文学研究科長による挨拶に始まり、前半は3名の講師による講演、後半は全員参加の総合討論を行いました。

前半では、シンガポール国立大学のデボラ・シャムーンさんは「『ベルサイユのばら』と1970年代における少女漫画の発展 ( *The Rose of Versailles and the Development of Shōjo Manga in the 1970s* )」、英国マンチェスター大学のシャロン・キンセラさんは「コスプレ、女装子、女の子らしさに対するパロディ: 若年男性の間で競い合う女装という最新流行ファッションの変遷の探求 ( *Cross-play, josouko, and parodies of girliness: exploring the dynamics of new modes of transvestism amongst young men* )」、札幌在住の漫画家・島本和彦さんは「男性読者の妄想と女性読者の妄想が出会うとき: 少年・少女漫画における異性表現 ( *When Male and Female Obsessions Meet in Reading: Heterosexual Representations in Shonen and Shōjo Manga* )」と題してお話いただきました。

後半の全体ディスカッションのコーディネートを担当したのが、本学文学研究科教授の押野武志さんです。押野教授による概観の後、日本における異性装文化の担い手でもあり研究者でもいらっしゃる三橋順子さんがコメンテーターとして登場しました。会場からの質疑の後、異性装を通しての性の多様性や表現の自由などが講演者らから提言されました。

最後は、新田孝彦副学長が、本学での男女共同参画事業について説明した後に、本シンポジウムはアカデミアにおける知の追求に重要な役割を果たすものであると表明して全プログラムを完了しました。

\*ESD: Education for Sustainable Development

「持続可能な開発のための教育」の意。1992年のリオ地球サミットで教育の重要性が盛り込まれ、以来定着した。2005年から14年までの10年間は「国連持続可能な開発のための教育10年 (USDESD)」として8つの行動目標が掲げられている。「文化多様性」はその一つ。



講演者



ディスカッションの様子

昨年の国際シンポジウムの情報はこちら

▼ 国際シンポジウム「ワーク・ライフ・バランス：持続可能な幸福の追求」

<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp/2011/worklife/>

第3回 サステナブル・キャンパス・コンテスト



行事予定

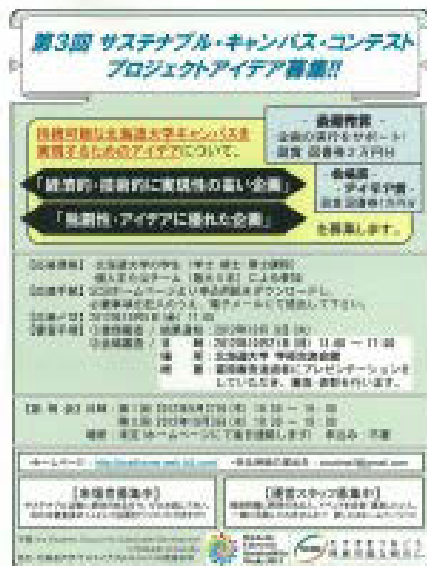
開催日時	2012年10月21日(日) 12:30 受付、13:00-17:00 (予定) <b>(終了しました)</b>
主催者	SCSD (The Students Council for Sustainable Development in Hokkaido University)
共催	北海道大学 サステナブルキャンパス推進本部
会場	学術交流会館 第1, 3, 5会議室
言語:日本語	対象:一般市民・大学生・院生

行事概要

学生のアイデアで北海道大学を「持続可能なエコキャンパス」にしよう!という想いから、学生によるサステナブルキャンパスコンテストを実施します。当日は、学生の自由な発想や研究成果の応用を活かした多様なプロジェクト案が発表される予定です。様々なアイデアを持つ学生からの企画応募をお待ちすると共に、環境やサステナブルキャンパス、学生のアイデアに興味をお持ちの学生・市民の方々のご来場を心よりお待ちしております。



- ・ **募集要項** (Word) **(終了しました)**
- ・ **応募用紙** (Word) **(終了しました)**



北海道大学側の実施責任者	諏訪部 力 (公共政策学教育部 修士2年)
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	SCSD (The Students Council for Sustainable Development in Hokkaido University) 諏訪部 力/Chikara Suwabe TEL:080-1818-0104 E-mail: <a href="mailto:scsdmail@gmail.com">scsdmail[at]gmail.com</a>
URL	<a href="http://scsdhome.web.fc2.com/index.html">http://scsdhome.web.fc2.com/index.html</a>

## 実施報告

私たちSCSDは、今年で3回目となるサステナブル・キャンパス・コンテストを実施しました。本コンテストでは、学生が大学キャンパスを持続可能にしていくアイデアをプレゼンテーションし、北大の教職員・学生によって、経済的・技術的実行性やオリジナリティなどの観点から審査されました。今年度は、エコカーを使用した新たな大学内の移動手段の提案、TFT\* によって食事という自然な形で途上国へ募金をしていく活動、構内にコミュニティカフェを建設し交流拠点を作るという3つの案が発表されました。また昨年引き続き藻岩高校の生徒、さらには特別枠として中京大学の学生や社会人の方にもご参加いただきました。多岐にわたるサステナビリティに関する活動、アイデアを一堂に集め、様々な分野や年代の方に発表していただいたことは、参加者はもちろん私たち運営側も非常に刺激になったのではないかと思います。

まだまだ小さいコンテストではありますが、今後はもっと多くの学生に参加いただき、少しでも多くの人にサステナビリティについて興味を持っていただくとともに、すでにサステナビリティに関心を抱いている人が自由に意見を発表し、互いに高め合えるような場にしていきたいと考えています。

\*TABLE FOR TWO、直訳すると「2人の食卓」。対象の定食や食品の購入1食につき、20円の寄付金がTFTを通じて開発途上国の子どもの給食になる募金プログラム。



プレゼンテーションの様子



藻岩高校の生徒と記念撮影

下記のようなアイデアが提案されました。(プログラムより抜粋)

#### タイトル:TFT-HOKKAIDO

現在世界では、10億人が飢餓に苦しんでいる一方で、主に先進国では10億人が食に起因した生活習慣病等に苦しんでいます。

TFTとはTABLE FOR TWO (二人のための食卓)の略であり、具体的には、先進国でヘルシーな食事をとることで、その一食の売り上げの20円分(アフリカの学校給食1食は約20円)が開発途上国の子供達に給食として寄付される、というものです。先進国での健康的な1食が、開発途上国での1食になるというシステムは、まさにWin-Winの関係であり新しい寄付の形として注目を集めています。

TFT-HOKKAIDOは北海道にTFTを普及させるべく活動しています。その活動を多くの方々に知ってもらうため、参加させて頂きました。

#### タイトル:北大にコミュニティセンターをつくる

北海道大学は札幌の都心に位置し、同時に住宅地に囲まれ、さらには学内に2万人近い学生や教職員を抱えています。キャンパスの中では学生が勉強したり、サークル活動に励んだり、地域の人が散歩したり、観光客がごはんを食べたりと毎日人の行き交いが絶えません。しかしこういった人たちが出会って話をするというような機会は意外と少ないのではないのでしょうか。

#### タイトル:つながる乗り物プロジェクト

環境科学院では、一昨年よりベロタクシーと呼ばれる自転車タクシーと、今年よりLCCと呼んでいる電動カートによる学内移動実験を行なっている。本試験は、北海道大学構内において、バスや自転車と違う新しい乗り物が、どのような役割を担うかを調査する目的で行った。

2年目となる昨年は、10月の2週間に2台での取り組みで、合計423組918名が利用した。利用者の年齢層は様々で、これまでになかった学生と地域の人々との多世代間交流が生まれた。本プロジェクトは、「新しい何か」を作ること得られる「持続可能性」の模索ではなく、既存のものを組み合わせることで活かせる「サステナブル」な企画の一つを提案する。

#### タイトル:水の環境教育プログラムを活用した持続可能な社会に向けた取り組み提案

近年の大雨発生頻度増への適応策として、市民を対象とした川の防災教育プログラムを提案する。45分以内で実施でき、たとえ小学生でも水害の危険を自ら判断し回避する力を養える教材とするため、既存の水の環境教育プログラム『プロジェクトWET』と、類似例である『地域安全マップ』の学習方法に着目し、「まわりより低いところ」と「水が流れているところ」という簡易な2つのキーワードを参加者に問いかけ、自宅から学校までの通学路で該当箇所を発見させることで浸水危険箇所と避難適地を短時間で啓発できるプログラムを提案し、実践的検証を行った。

本発表では、このプログラムの実践と普及啓発を北大構内においてお勧めするものである。



## 行事予定

開催日時	2012年10月24日(水)～10月28日(日) (終了しました)
主催者	北大映画館プロジェクト
共催	(後援) 北海道、札幌市・札幌市教育委員会、北海道教育委員会、(公財)北海道文化財団、(財)札幌市芸術文化財団、北海道新聞社、読売新聞北海道支社、朝日新聞北海道支社、毎日新聞北海道支社、日本経済新聞社札幌支社、産経新聞社札幌支局、HBC、STV、HTB、UHB、TVh、J:COM札幌、FMノースウェーブ、AIR-G' エフエム北海道、三角山放送局、FMアップル
会場	クラーク会館
言語	日本語・英語 (同時通訳あり)
対象	専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>2006年よりスタートした CLARK THEATER も今年で7年目を迎えます。</p> <p>今年も“映像・映画を通じたコミュニケーションの場の創造”を目指し、文化的に優れた映画を楽しむことのできる映画館を期間限定で開催します。また、大学内に映画館があることの意味や、映像教育の実践という視点から、持続可能な社会を議論することにつながると思います。</p> <p>今年の CLARK THEATER のテーマは「Routes」。</p> <p>この Routes というテーマには、原点を意味する「root」と道程を意味する「route」のふたつの言葉の意味があります。7年目を迎えた CLARK THEATER の起源、このプロジェクトを立ち上げた当時のメンバーの気持ちや目的を見つめ直し、北大に映画館がある意義、学生運営である意義を再確認し、映画館としての在り方を探り、CLARK THEATER の原点から未来を繋げていきたいと思えます。</p> <p>また、映画の中にはみなさまが共感できるような描写があるのではないかと思います。映画を通して、お客様にもそれぞれの持っている原点に立ち返っていただき、何かを得るための一助となってほしいという願いを込めました。</p> <p>このようなテーマを掲げたもとの、その実現に向け、長編プログラムや短編プログラム、企画プログラムなど多種多様な企画を取り揃えます。CLARK THEATER で出会った映画が、みなさま一人ひとりのこれから、そして社会のこれからを考える一助となればと思います。</p> <p>また、今年行う企画の一つとして、震災を取り扱ったものを企画しています。映像の力を借りて、直接の被害が少なかった札幌の地からできるサポートを考えるきっかけになると考えています。</p> <p>今年もスタッフ一同皆様のご来場を心よりお待ちしております。</p>

北海道大学側の実施責任者	岩本 佳保里 (理学部数学科3年)
事前申し込み	不要(直接会場にお越し下さい)
参加費	一部有料(詳細は後日決定します)。
問い合わせ先	北大映画館プロジェクト / Hokkaido University Theater Project TEL : 090-2071-1952 E-mail: info[at]clarktheater.jp
URL	<a href="http://www.clarktheater.jp/ct2012/">http://www.clarktheater.jp/ct2012/</a>

## 実施報告

皆様のご声援の下、今年も無事に7年目となるCLARK THEATERを終えることができました。ご来場いただきましたお客様、ご支援いただきました関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

CLARK THEATER 2012では「Routes」というテーマを設定しました。このテーマには原点を意味する「root」と道程を意味する「route」の二つの意味を持たせました。7年目を迎えた今年、CLARK THEATERを始めた当時のメンバーの想いや目的を見つめ直し、原点から未来へと繋げていきたいという想いを込めました。また、北大に映画館がある意義、学生運営である意義を再確認し、映画館としての在り方を探っていました。

もちろんこのテーマは私達だけに向けたものではありません。人それぞれ歩んできた道は違っても、映画の中には皆様が共感出来るような描写もあると思います。映画を通して、皆様それぞれが持っている原点から何かを得る一助、そして未来へと繋がる想いとなっていれば幸いです。

CLARK THEATERを通じて皆様の「Routes」を探っていただきたいとの思いから、作品・企画を選定いたしました。

オープニングでは、学生や大人だけでなく、子供も楽しめるアニメーション作品「ヒックとドラゴン」の上映を行いました。また、北海道を舞台とした映画「しあわせのパン」の上映および三島有紀子監督トークショーを行い、監督と北海道民との交流をはかるなど、映画ファンにはまたとない機会を創出することができました。

さらに東日本大震災を題材とした映画の上映を行い、被災地で復興支援活動をしている平了さんと環境省北海道環境パートナーシップオフィスにて震災支援活動を行っている有坂美紀さんによる対談が行なわれ、参加者にとって、生きる意味や生き方について考えるきっかけとなりました。

他にも、梶野竜太郎監督と声優であり女優である初原千絵さんをお呼びしての「茹田蟹幸ライジング」上映とトークショーなど、開催期間の5日間で、シネマコンプレックスで公開しない長編・短編作品から企画などをあわせて計34作品・20プログラムを上映致しました。

今後も私たち映画館プロジェクトは映像文化を今以上に発展させるべく、北大に常設映画館の創設に向けて活動を続けていきます。その中で現代社会が内包する問題を様々な切り口で訴えていき、また教育機関である大学に常設映画館が存在することの可能性を訴えていければと思います。

クラークシアター2012 公式HP>>> <http://www.clarktheater.jp/ct2012/>





多くの観客で埋まった会場



スタッフで記念撮影

国際協力プロジェクトをいかに実現するか：  
開発コンサルタントが語る途上国現場と仕事



## 行事予定

開催日時	2012年10月25日(木) 11:40 開場、12:10 開講 (終了しました)
主催者	地域経済経営ネットワーク研究センター (REBN)
共催	大学院経済学研究科
後援	海外コンサルティング企業協会 (ECFA)、JICA 北海道(札幌)
会場	人文社会科学総合教育研究棟 W102 (北大博物館向い)
言語	日本語 (終了後の質疑応答のみ英語可) 対象: 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>専門と技術を活かして持続可能な開発に貢献したいと思いませんか? 国際協力の仕事は、国連・世界銀行や JICA・JBIC による「開発行政」だけではありません。開発コンサルタントは、開発プロジェクトの企画・調査から実現まで、国際協力の最前線で途上国政府や開発行政を支える、技術者・専門家集団です。本セミナーでは、北大出身者が開発コンサルタントの仕事現場を紹介します。将来的に国際協力の仕事をしたい人には、質疑応答やキャリア相談も歓迎します (事前予約推奨。文理を問いません。)</p>
<h2>プログラム</h2>	
12:10 : 開講	
12:10-13:00 : 「グローバルに活躍する開発コンサルタントの世界」	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 社団法人 海外コンサルティング企業協会</li> <li>• 専務理事 高梨寿氏</li> </ul>	
13:00-14:00 : 「インドネシア産業活性化を仕掛ける北大工学部卒業生」	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• (株)コーエイ総合研究所</li> <li>• コンサルティング第1部 部長 岡田卓也氏 (北大1988年卒)</li> </ul>	
14:00- : 就職相談	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="http://www.ecfa.or.jp/japanese/index.html">http://www.ecfa.or.jp/japanese/index.html</a></li> <li>• <a href="http://www.kri-inter.co.jp/">http://www.kri-inter.co.jp/</a></li> </ul>	
<p>連携: 松永龍児・国際協力マネージャー、正木幹生・国際本部コーディネーター・特任講師</p>	



北海道大学側の実施責任者	大学院経済学研究科 准教授・国際交流委員長 高井哲彦
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	地域経済経営ネットワーク研究センター (REBN) 事務局 塚田久美子 Tel: 011-706-4066  E-mail: sacade[at]econ.hokudai.ac.jp
URL	<a href="http://rebn.econ.hokudai.ac.jp/">http://rebn.econ.hokudai.ac.jp/</a>

## 実施報告

本セミナーは、国際協力的手段と職業キャリアの選択肢として、開発コンサルタントの仕事を紹介しました。国際協力は、国連・世界銀行や JICA・JIBC による開発行政ではありません。開発コンサルタントは、開発プロジェクトの企画・調査から実現まで、国際協力の最前線で途上国政府や開発行政を支える、技術者・専門家集団です。

### 進行と成果

- ① 開会挨拶は、地域経済経営ネットワーク研究センター(REBN) センター長の町野和夫が行い、司会進行は、経済学研究科准教授の高井哲彦が務めました。
- ② 第1講演は、海外コンサルティング企業協会 (ECFA) 専務理事の高梨寿氏による「グローバルに活躍する開発コンサルタントの世界」でした。開発コンサルタントのキャリアパスや仕事内容、途上国での仕事環境、当事者の声などが紹介されました。現場ビデオは、臨場感とユーモアが溢れ、会場から笑いが出ました。
- ③ 第2講演は、(株)コーエイ総合研究所・コンサルティング第1部部長の岡田卓也氏(北大工学部1988年卒)による「インドネシア産業活性化を仕掛ける北大工学部卒業生」でした。岡田氏がご自身のキャリアパスを紹介した上で、インドネシア産業活性化をいかに実現したか、具体的に仕事内容とキャリアの進化を説明して下さいました。

④ 講演終了後、講師の高梨氏、岡田氏、(株)コーエイ総合研究所 取締役 川村典章氏、国際本部国際協力マネージャーの松永龍児氏がブースを作り、国際協力キャリア形成・学習について個別相談を行いました。各ブース10名以上の行列ができ、1時間以上活発な質疑応答が行われました。

#### 今後の展開

① 再度の機会があれば前向きに検討したいと思います。アンケートの満足度は非常に高いものでした。とくに北大卒業生の招聘講演は、北大生に効果的だと思いました。

② REBNとしては、今後も産学官連携を強めていきたいと考えます。



熱心に聞き入る参加者



個別の就職相談





## 行事予定

開催日時	2012年10月26日(金) 14:45受付、15:00～17:00 (終了しました)
主催者	北海道大学 国際本部
会場	北海道大学 国際本部 2階大講義室
言語:英語 (通訳あり)	対象:大学生・院生
行事概要	<p>北海道大学が交流協定を結んでいる海外の大学の代表者が、各大学の「持続可能な社会の実現(SD)」に向けた教育および学生の参画状況について、各大学の魅力とともにスピーチをします。集まるのはSDに向けた研究と教育に力を入れている大学ばかりです。</p> <p>各大学からのスピーチ後には、国際連携課より留学についての案内も行います。留学に興味のある人、海外の大学のSDの取り組みに関心のある人は、この機会をお見逃しなく!</p> <p><b>プログラム</b></p> <p style="text-align: right;">司会：国際支援課 河野 公美</p> <p>開会</p> <p>《挨拶および参加者紹介》</p> <p>国際本部プロジェクト・ディレクター</p> <p>文学研究科 准教授 瀬名波 栄潤</p> <p>1.Sustainable Development(SD) について</p> <p>国際本部プロジェクト・ディレクター</p> <p>文学研究科 准教授 瀬名波 栄潤</p> <p>2. 協定大学での SD 教育への取組および学生の参画状況について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ・ポートランド州立大学 Adam Thomas Walters 氏</li> <li>・カナダ・アルバータ大学 Kimberly Jennifer Miller氏</li> <li>・イタリア・トリノ工科大学 Silvia Giordano 氏</li> <li>・ナイジェリア・ナイジェリア大学 Chigozie Michael Ezugwu氏</li> <li>・ナイジェリア・エボニ州立大学 Patricia Nneka Iweka 氏</li> </ul>

### 3. 協定大学への留学について

国際支援課 河野 公美

### 4. Q & A Session

※会場の皆さんからの質問コーナーです。日本語での質問も受け付けます。

北海道大学側の実施責任者 北海道大学 国際本部 国際支援課 河野公美

事前申し込み 必要 (ウェブサイトより、10月26日まで受付)

参加費 無料

問い合わせ先 北海道大学 国際本部 国際支援課  
河野公美  
Tel: 011-706-8053  
E-mail: jryugaku[at]oia.hokudai.ac.jp

## 実施報告

昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、アメリカ・ポートランド州立大学、カナダ・アルバータ大学、イタリア・トリノ工科大学、ナイジェリア・ナイジェリア大学、同エボニ州立大学の5大学でした。本年から、学生の目線での情報提供を目的に、発表者を主に北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP) で本学に交換留学している留学生に依頼しました。

イベントでは、各大学がサステナブル・ディベロプメント (SD) についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されました。また、イベント後半ではナイジェリアの伝統的なダンスが披露されました。

本イベントは本年度で4度目の開催ですが、参加した学生達に実施したアンケートでも「SDについて興味を持たた」、「留学への意欲が高まった」との回答が多くみられ、また留学生も自らの大学を直接アピールできる貴重な機会ととらえ、十分な準備を重ね、当日も満足感を抱いていたようでした。また、来年度に招聘してほしい大学の希望についても、参加学生のアンケートで聴取することができたので、可能な限り希望を取り入れていきたいと考えています。



発表の様子



「留学への意欲が高まりました」



ナイジェリアのダンスを楽しむ発表者と参加学生

## 情報科学研究科教員の企画:やさしい情報科学とライフイノベーション公開講座

—体験しながら学ぶ理科・科学入門教室—



## 行事予定

開催日時	2012年10月27日(木) 13:00 受付、13:30 開講 (終了しました)
主催者	情報科学研究科教員 3名
後援	最先端次世代研究開発プログラム
会場	北海道大学学術交流会館第4会議室
言語:日本語 (通訳なし)	対象:一般市民・大学生・院生

## 行事概要

情報科学(Information science, IT)は生活の質の向上と維持に欠かせない科学・技術として、社会の中で私達の目に直接に触れないところでも活用されています。私達の暮らしの中で将来利用されることになる革新的技術(イノベーション)に関わる最先端研究を高校生と高専生にも理解できるように、やさしく説明します。特に、高校・高専等の学校で学ぶ「理科」と大学で研究する「科学・技術」がどの様につながっているかを具体的な次の3つの例を通してお話します。



## プログラム

- (1)キラル分子の追跡(平田 拓)
- (2)脳外科手術シミュレータ(近野 敦)
- (3)耳の不思議と代替機械(舘野 高)

理科好きはもちろん、理科嫌いな学生の方も大歓迎です。



北海道大学側の実施責任者	北海道大学 情報科学研究科 教授 舘野高
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	情報科学研究科 舘野 高 TEL : 011-706-6763 E-mail: tateno[at]jst.hokudai.ac.jp

## 実施報告

我々の社会の持続可能な発展(Sustainable Development、以下SD)に資する教育に貢献するため、情報科学研究科の教員3名(平田拓教授、今野敦教授及び舘野高教授)が「やさしい情報科学とライフインノベーション公開講座—体験しながら学ぶ理科・科学入門教室」を開催致しました。

本行事は、情報科学研究科では、初めての試みであり、最先端・次世代研究開発支援プログラムの支援を現在受けている教員が自主的に開催を提案して実施した催しです。情報科学、(Information science IT)は生活の質の向上と維持に欠かせない科学・技術として、社会の中で私達の目に直接に触れないところでも活用されています。そこで、私達の暮らしの中で将来利用されることになる革新今野敦教授的技術(イノベーション)に関わる最先端研究を、科学・技術を専門にしていない一般の人にも理解できるように、やさしく説明しました。特に、次の3つの具体的なタイトル((1)キラル分子の追跡、(2)脳外科手術シミュレータ、(3)耳の不思議と代替機械)を掲げて、各1時間程度の講演を致しました。

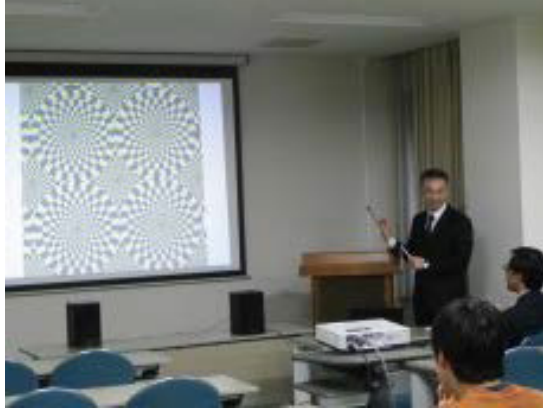
参加者は、本学のスタッフ5名(教員3名を含む)、学内4名、学外11名の合計20名でした。各公演後は、質問が2~3寄せられるなど、参加者の興味の大きさを物語っていました。また、アンケート結果には、聴講者の声として、「生命科学と情報科学を組み合わせた興味深い研究の話が、とても分かりやすく聞けて良かった」や「情報とライフサイエンス・医学等をつなげる分野の広さを知ることができ興味深い話ばかりでした」が多く寄せられました。聴講者の声から察すると、SDの基盤として、生命科学とITの境界分野への関心の高さが伺えます。公開講座開催の広報が十分ではなかったため、参加は予想を下回りました。今後は、広報活動や内容をさらに工夫して、より多くのかたに情報科学研究科の公開講座に足を運んでいただければと考えています。



講演する平田拓教授



講演する今野敦教授



講演する館野高教授

## 経済学部主催：第9回プレゼン・ディベート大会 原発は是か非か!?

## ーエネルギー政策と北海道経済ー



## 行事予定

開催日時	2012年10月27日(土) 9:00 受付、9:30 開始(予定) (終了しました)
主催者	北海道大学 経済学部
会場	人文・社会科学総合教育研究棟 W103(メイン会場), W102, W101, W203
言語:日本語(通訳なし)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>北海道大学のさまざまな分野の学部生がチームを組み「原発は是か非か!?-エネルギー政策と北海道経済-」をテーマに独自のアイデアを発表(プレゼン)し、論戦(ディベート)の中でその長短所を検証します。</p> <p>関西電力大飯原子力発電所4号機が再稼働をはじめ、原子力発電に関する論議が活発化しています。今ここで改めて、原子力発電は継続すべきなのか、廃止すべきなのか。エネルギー政策の観点か、北海道経済への影響も絡めて提言を競います。</p> <p>市民, 高校生, 大学生, 院生, 環境, エネルギー, 経済関係者のご来場をお待ちしています。</p>
北海道大学側の実施責任者	北海道大学 経済学研究科 教授 鈴木輝好
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	<p>北海道大学経済学部          北海道大学経済学部主催「第9回プレゼン・ディベート大会」運営事務局          (担当:塚田)          TEL: 011-706-4066          FAX: 011-706-4066          E-mail : sacade[at]econ.hokudai.ac.jp</p>
URL	<a href="http://www.econ.hokudai.ac.jp/">http://www.econ.hokudai.ac.jp/</a>



## 実施報告

今年で第9回目を迎えた経済学部主催プレゼン・ディベート大会は、今回テーマを「原発は是か非か!? - エネルギー政策と北海道経済 -」としました。初めて参加を学部生のみ限定し、13チームが参戦しました。初参加のゼミチーム、文学部、農学部からの参加もあり、各チームは知力をつくして様々な提言案を示しました。地域の特性を活かしたバイオガス、イモ発電などの代価エネルギーの提言、原発の是非をリスクの比較をベースに持論を展開したチームなどそれぞれの切り口で独創的な案を提示し、ディベートに臨みました。

ホットなテーマを取り上げたこともあり、一般からのオーディエンスもたくさんご参加いただき、場を盛り上げていただきました。

また、今回初めてもう一度戦いたい!という参加者の声を受け、敗者復活戦を試み、4チームが参加しました。7時間以上にわたる数々の熱戦を繰り広げ、今大会を制したのは下記のチームです。

優勝チーム「4人と1匹」は手堅く論をまとめ、すきのない試合展開で他のチームを圧倒しました。ポスターコンテストも他を大きく引き離し優勝し、大会初のダブル優勝を果たしました。準優勝はプレゼンテーションと独創性に優れた「ダークホース」チーム。三位は2年生チームながら鋭い試合運びで入賞を果たした「僕と契約してディベーターになってよ」チームでした。

今回もたくさんの学生が参加してくれました。多くの方々の聴講もいただきました。参加者は100名以上にのぼり、盛況のうちに大会を終えることができました。ありがとうございます。

優勝 4人と1匹(高井ゼミ)

準優勝 ダークホース(橋本ゼミ)

三位 僕と契約してディベーターになってよ(経済・農学部)

三位(敗者復活戦勝者) - 3%(高井ゼミ)

ポスターコンテスト優勝 4人と1匹(高井ゼミ)



ディベートの様子



決勝戦のプレゼンテーション

大学改革シンポジウム サステナブルキャンパス国際シンポジウム 2012



行事予定

開催日時	2012年10月29日(月) (終了しました)
主催者	北海道大学 サステナブルキャンパス推進本部、施設部
共催	一般社団法人国立大学協会
後援	北海道、札幌市、日本建築学会北海道支部、北海道新聞社、北海道建設新聞社
会場	北海道大学 学術交流会館 大講堂
言語	日本語・英語 (同時通訳)
対象	専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要

副題：サステナブルキャンパス構築のための計画とその評価

今回のシンポジウムでは、本学とサステナブルキャンパスに関する国際交流プロジェクトを協働している欧州3大学からサステナブルキャンパス構築のための行動計画や地域と連携した計画、そしてPDCAサイクルを回すための評価項目及びその評価手法について紹介いただき、日欧における計画やその評価項目・手法の違いについて議論し、今後のサステナブルキャンパス構築に向けた知見を得ることを目的とします。

**大学改革シンポジウム**  
**サステナブルキャンパス国際シンポジウム2012**  
 サステナブルキャンパス構築のための計画とその評価

**International Symposium on Creation of Sustainable Campuses 2012**  
 Value Metrics, Participatory Assessment and Policies for a Sustainable University Campus  
 Conference Hall, Hokkaido University, Sapporo, Japan 29 October 2012

得られた国際シンポジウムでは、日欧におけるサステナブルキャンパスに関するトピックの大学を、これまでの実績(Achievements)やこれからの課題(Challenges)について紹介いただき、サステナブルキャンパス構築に向けた今後の方向性を検討します。

今回のシンポジウムでは、本学とサステナブルキャンパスに関する国際交流プロジェクトを協働している欧州3大学からサステナブルキャンパス構築のための行動計画や地域と連携した計画、そしてPDCAサイクルを回すための評価項目及びその評価手法について紹介いただき、日欧における計画やその評価項目・手法の違いについて議論し、今後のサステナブルキャンパス構築に向けた知見を得ることを目的とします。

A university campus must be a model for a sustainable society and JCU will offer the second opportunity to discuss effective means to make it possible. The second symposium will focus on evaluation methodologies, indicators and value based assessment practices for various stakeholders in EU and Japan. Speakers are invited from Polytechnic of Turin, University of Cambridge and VU University Amsterdam as well as Japanese universities.

**10.29.mon**

開催 12時30分  
 開催日 10月29日(月)  
 会場 北海道大学 学術交流会館 大講堂(同時通訳あり)  
 主催 北海道大学サステナブルキャンパス推進本部、北海道大学施設部  
 共催 一般社団法人国立大学協会  
 後援 北海道、札幌市、日本建築学会北海道支部、北海道新聞社、北海道建設新聞社  
 協賛 パナソニック(北海道)、北海道電力、三菱電機  
 参加申込 7/25~10/26までウェブで受付、参加費無料  
<http://www.sustain.hokudai.ac.jp/ev/>

Date: 29th October 2012, Monday  
 Time: Doors open at 12:30 pm, Symposium begins at 1:00 pm  
 Place: Hokkaido University Conference Hall  
 Language: Japanese, English (Open to the public with simultaneous translation)  
 Note: Hokkaido University, Office for a Sustainable Campus, Turin's Polytechnic University  
 Pre-registration: Between 23rd of July and 26th of October, by web, free of charge.

**プログラム**

12:30~13:30 開場	Registration on the day between 12:30 pm and 1:00 pm
13:00~13:30 開会式	Opening Remarks, 1:00 pm to 1:30 pm
13:30~14:30 北海道大学 学術部長 野上 隆 北海道大学 学術部長 野上 隆 北海道大学 サステナブルキャンパス推進本部 部長 藤田 隆 北海道大学 学術部長 野上 隆	Opening remarks -- Dr. Taroji Mikita, Vice President of Hokkaido University Comprehensive policies - implementation of metrics of Excellence Outline: Japan's, Britain and Netherlands of Japan Introduction of the event -- Dr. Takao Goto, Associate Professor, Graduate School of Environmental and Cultural Studies, Hokkaido University
14:30~15:15 日中休会	Pre-registration by pre-registration: from 9:00 1:30 pm to 3:15 pm Pre-registration of Japan: 1:30 pm to 2:00 pm Pre-registration of Cambridge: 2:00 pm to 2:45 pm Pre-registration of Amsterdam: 2:45 pm to 3:00 pm JCU Lecture: 2:00 pm to 3:15 pm
15:15~16:30 日中休会	Break: 15:15 pm to 15:30 pm
16:30~17:00 日中休会	Pre-Registration by pre-Registration: from Japan: 3:30 pm to 4:15 pm Pre-Registration of Cambridge: 4:15 pm to 4:30 pm Pre-Registration of Amsterdam: 4:30 pm to 4:45 pm
17:00~17:30 日中休会	Pre-Registration of Japan: 4:15 pm to 4:30 pm Pre-Registration of Cambridge: 4:30 pm to 4:45 pm Pre-Registration of Amsterdam: 4:45 pm to 5:00 pm
17:30~18:30 日中休会	Pre-Registration of Japan: 4:15 pm to 4:30 pm Pre-Registration of Cambridge: 4:30 pm to 4:45 pm Pre-Registration of Amsterdam: 4:45 pm to 5:00 pm
18:30~20:00 日中休会	Pre-Registration of Japan: 4:15 pm to 4:30 pm Pre-Registration of Cambridge: 4:30 pm to 4:45 pm Pre-Registration of Amsterdam: 4:45 pm to 5:00 pm

北海道大学側の実施責任者	横山隆（サステイナブルキャンパス推進本部プロジェクトマネージャー）
事前申し込み	必要（ウェブサイトより）申込受付期間：7/23～10/26
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 サステイナブルキャンパス推進本部 TEL：011-706-3660，FAX：011-706-4884 E-mail：osc[at]osc.hokudai.ac.jp
URL	<a href="http://www.osc.hokudai.ac.jp/">http://www.osc.hokudai.ac.jp/</a>

## 実施報告

平成24年10月29日（月）学術交流会館にて、「サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2012」を開催しました。本シンポジウムは、国立大学協会との共催による大学改革シンポジウムの一環として開催され、会場には、国立大学法人関係者や自治体・企業関係者、学生など、およそ90名が訪れました。

最初に、本学とサステイナブルキャンパスに関する国際交流プロジェクトを協働している欧州3大学（トリノ工科大学、ケンブリッジ大学、アムステルダム自由大学）からサステイナブルキャンパス構築に向けた行動計画や地域連携及びその評価項目や評価手法について発表していただきました。

その後、文部科学省整備計画室や札幌市から、これからの大学における施設整備とサステイナビリティとの関連性や行政側からみた大学の位置づけ、将来の地域連携について講演いただき、本学からはこれまでのサステイナブルキャンパス構築に関する活動とSTARS国際パイロット事業\*に関して報告しました。

最後に、欧州と日本における地域連携や行動計画などをテーマに、文部科学省、札幌市、欧州3大学及び本学をメンバーとしたパネルディスカッションが行われました。

また、会場ホワイエでは民間企業の協力により、環境配慮型商品の展示やデモンストレーションが行われ、多くの方が見学し盛況でした。

さらに、今回初めての試みとして、USTREAMによるインターネットライブ中継を行いました。このUSREAMに関して、国内外の多くの方々から反響があり、ライブで延べ50名、録画で延べ142名（2012年12月13日現在）の方々に視聴していただきました。

会場からは「机上の空論ではない生のサステイナブルキャンパスの様々な計画について知ることができた」「文部科学省、札幌市、北大の取組を一度に聞ける貴重な機会」「北大のサステイナビリティへの取組は先進的で大変参考になった」という感想もあり、大変有意義なシンポジウムとなりました。

今後、このシンポジウムの成果をキャンパス総合環境性能評価システムの策定に活用していく予定です。

\* STARSとは北米の高等教育機関を対象としたサステイナビリティ調査・評価システムのことで、現在STARSを利用して世界中の高等教育機関を対象にサステイナビリティ調査・評価を行う国際パイロット事業が実施されている。



講演者の集合写真



パネルディスカッションの様子

## 時計台サロン:農学部に聞いてみよう自然と食の巡り逢い



## 行事予定

開催日時	2012年10月30日(火) 17:30 開場、18:00 開演 (終了しました)
主催者	北海道大学大学院農学研究院
共催	北海道新聞社
後援	札幌国際プラザ、札幌農学振興会
会場	札幌市時計台
言語:日本語(通訳なし)	対象:一般市民

## 行事概要

時計台サロンは毎月1回札幌市時計台で開催される公開講演会です。当研究院の研究者や外部からの演者を招いて、一般の間で関心の高い「農」に関連した話題をわかりやすく解説し、問題点を広く市民に知ってもらおうと企画されたものです。10月30日はサステナビリティに関連した自然の管理と人との調和、自然と調和した食料としての草食動物に関する話題を提供します。

## プログラム

「森川里海 — つながりの科学」中村太士(農学研究院 森林生態系管理学教授)

「安心・安全な草食動物の生産」近藤誠司(北方生物圏フィールド科学センター長 牧畜体系学教授)





北海道大学側の実施責任者	北海道大学 農学研究院 教授 貴島祐治
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学農学事務部 TEL: 011-706-2420
URL	<a href="http://www.agr.hokudai.ac.jp/">http://www.agr.hokudai.ac.jp/</a>

## 実施報告

「時計台サロン農学部に聞いてみよう」は平成24年4月から毎月1回札幌市時計台2階ホールで開催している市民向けの公開講座です。

10月30日の本サロンは、サステナビリティに深く関わる農学的な話題を、「自然と食の巡り逢い」と題して、本研究院の中村太士教授(森林生態系管理学)と北方圏生物フィールドセンターの近藤誠司教授(畜牧体系学)が講演しました。

中村太士教授の演題は「森川里海 — つながりの科学」、自然の営みの中で保たれてきた様々な生態系のバランスが、人為的な手が加えられることによって、崩壊していく事例を紹介しました。良好で持続可能な環境を維持する上で、自然と人間生活の調和を如何に形成するか、科学的な裏付けのある情報を実際の現場に与えることが重要性であると話されました。

近藤誠司教授は「安心・安全な草食動物の生産」について講演され、北大農場で実施されている牧草を中心とした乳牛や肉牛の飼育が、負荷の少ない持続可能な循環型の農法として優れていることを、具体的研究成果により紹介していただきました。また、話題は、北大で取り組んでいるどさんこ(北海道在来馬)の系統維持やエゾ鹿対策についての意義、苦労する点などにも及びました。

参加者は、一般の方が50名、本学関係者が30名でした。それぞれの講演に対して来場者から多くの質問があり、約20分に及ぶ討論となりました。アンケートでは興味深い講演会であったとの回答が大半でした。

今後も一般の方々に理解されやすい、農学に関連のある話題を提供していこうと考えています。

### アーカイブ映像

講演の様子が映像にてご覧いただけます。

[「森川里海 — つながりの科学」](#) 中村太士教授

[「安心・安全な草食動物の生産」](#) 近藤誠司教授



## 行事予定

開催日時	2012年11月2日(金)～3日(土) 18:30 受付開始、19:00 講演 <b>(終了しました)</b>
主催者	北海道大学 教育学研究院附属 子ども発達臨床研究センター
会場	人文社会科学総合教育研究棟 W203
言語:日本語(通訳なし)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>閉塞的な社会状況は人間の発達可能性を制約し、支援の困難性をもたらしている。この時代のキーワードとなった「生きづらさ」を乗り越え、解放と持続可能性を見通す発達支援実践のありかたを探求する。</p> <p>詳細は<a href="#">こちら</a></p> <p><b>プログラム</b></p> <p>A 基調講演 11月2日(金) 19:00～21:00</p> <p>『『生きづらさ』を超えて』 講演者:栗原彬(立教大学名誉教授)</p> <p>B シンポジウム I 11月3日(土) 9:30～12:00</p> <p>『『生きづらさ』を超える学び～教育と福祉が出会うとき』 話題提供者:佐藤洋作(NPO法人 文化学習協同ネットワーク代表) 朝比奈ミカ(中核地域生活支援センターがじゅまる・センター長) 竹内常一(国学院大学名誉教授) コーディネーター:日置真世(NPO法人 地域生活支援ネットワークサロン) 松本伊智朗(北海道大学大学院教育学研究院)</p> <p>C シンポジウム II 11月3日(土) 13:00～15:30</p> <p>「学びの場の再定義～学校と仕事が出会うとき」 話題提供者:井沼淳一郎(大阪府立堺東高等学校) 大串隆吉(東京都立大学名誉教授) コーディネーター:横井敏郎(北海道大学大学院教育学研究院) 上原慎一(北海道大学大学院教育学研究院)</p>
北海道大学側の実施責任者	北海道大学大学院教育学研究院 宮崎隆志
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 教育学研究院 宮崎隆志/Takashi Miyazaki Tel: 011-706-3495 Fax: 011-706-3495

## 実施報告

11月2日には「『生きづらさ』を超えて」と題する基調講演が立教大学名誉教授の栗原彬氏によって行われました。それを受け、翌3日午前には「『生きづらさ』を超える学び～教育と福祉が会うとき」と題したシンポジウム(登壇者:佐藤洋作氏(NPO法人文化学習ネットワーク代表)、朝比奈ミカ氏(中核地域生活支援センターがじゅまる・センター長)、竹内常一氏(國學院大学名誉教授))が、3日午後には「学校の場の再定義～学校と仕事が出会うとき」と題したシンポジウム(登壇者:井沼淳一郎氏(大阪府立堺東高等学校教諭)、大串隆吉氏(東京都立大学名誉教授))が開催されました。

2日間の参加者の延べ人数は222名に上り、ますますの集客数となりました。参加者の学内関係者と学外者の比率は約1:1でしたが、学内に留学している学生の参加も数名ありました。参加者の多くからは、おおむね肯定的な感想が寄せられました。また登壇者・参加研究者からは、教育・福祉・労働の関連を問う今回の企画は、現代社会の改革への問題提起の場となったとの意見を頂戴し、今後の研究における示唆を得る機会となりました。

今回の主題である「『生きづらさ』を超えて」は、「生きづらさ」という事実の中にこそ、人間の尊厳が保障される新しい社会への扉が開かれているのではないかという私たちの研究関心を表しています。登壇者の発表内容は、いずれもこの関心に真正面から応えるものでした。今後は、成果のとりまとめと刊行を予定しています。



講演の様子



シンポジウムの様子



## 行事予定

開催日時	2012年11月3日(土) 12:00 受付開始 13:00 開講 (終了しました)
主催者	北海道大学 保健科学研究所
会場	北海道大学大学院保健科学研究所 3-1 講義室
言語:日本語(通訳なし)	対象:一般市民・大学生・院生

### 行事概要

「安心して暮らせる社会の仕組み」をキーワードに保健科学の3名の研究者が、ちょっとためになる興味深い話題を提供します。

第1話は、増加しつつあるアレルギーについて。第2話は、看護師・保健師・助産師を上手に活用する方法とは。第3話は、高齢者の延命治療について、欧米と比較した我が国の寝たきり高齢者の問題を解説します。

## プログラム

- 1) アレルギーの不思議 小林 清一
- 2) あなたの健康生活を支える看護師活用術 良村 貞子
- 3) 今こそ考えるとき、高齢者の延命治療 我が国と諸外国の比較から 宮本 顯二



北海道大学側の実施責任者	北海道大学大学院保健科学研究院 傳田健三
事前申し込み	必要(電話またはメールにて、10月31日(水)まで受付)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 保健科学研究院 医学系事務部保健科学研究院事務課 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu[at]hs.hokudai.ac.jp
URL	<a href="http://www.hs.hokudai.ac.jp">http://www.hs.hokudai.ac.jp</a>

## 実施報告

保健科学研究所の公開講座は「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を行いました。

第1限目は「アレルギーの不思議」と題して、小林清一教授が国民の50%が症状をもつといわれるアレルギーについて、その基本的事項と社会的に最もよく認識されているI型アレルギーについて解説しました。第2限目は「あなたの健康を支える看護師活用術」と題して、良村貞子教授が保健医療福祉の現場で活躍している看護職者の業務の内容を紹介し、いつ、どのように看護職者に相談したらよいかを説明しました。第3限目は「今こそ考える時、高齢者の延命治療—我が国と諸外国との比較から—」と題して、宮本顯二教授がいわゆる「寝たきり老人」がいないといわれる諸外国の高齢者の終末期医療を紹介し、我が国の現状の問題点と今後の展望を解説しました。

講演者はサステナビリティ・ウィーク2012のテーマである「安心して暮らせる社会作り」をキーワードとして、保健科学の視点から詳しくかつ分かりやすく解説しました。参加者からは概ね好評を博し、さまざまな質問が出ました。それに対して、3人の各講師はわかりやすく丁寧に解説を行いました。

今後も毎年、その時の時代を反映するようなテーマを設定して、同じ時期に公開講演会を開催していく予定です。



講演の様子



満員の聴講席

## アーカイブ動画

講演動画がご覧いただけます。

### 開会のあいさつ

1. [アレルギーの不思議 1/2](#) (小林 清一)
2. [アレルギーの不思議 2/2](#) (小林 清一)
3. [今こそ考える時、高齢者の延命治療—我が国と諸外国との比較から—1/2](#) (宮本 顯二)
4. [今こそ考える時、高齢者の延命治療—我が国と諸外国との比較から—2/2](#) (宮本 顯二)

### 閉会の挨拶

## 第3回 3.11 札幌若もの会議 ～持続可能な社会と被災地の復興～



## 行事予定

開催日時	2012年11月17日(土) 12:30 受付、13:00 開講 (終了しました)
主催者	Sapporo Youth Conference for 3.11 (SYC) 実行委員会
共催	北海道大学サステナブルキャンパス推進本部
会場	クラーク会館・大集会室、展示スペース
言語: 日本語(通訳なし)	対象: 一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>本会議を主催するのは、これまで震災支援活動を行ってきた学生達です。震災を忘れず継続した支援活動を実現していくことを目的として、みなで真剣に考え討議する熟議空間の創出をめざしています。昨年12月に開催された第一回会議、今年7月の第二回会議ではいずれも学生を中心に100名を越える参加がありました。第三回会議では「持続可能な復興支援」をテーマとして、持続可能な被災地の復興とそれに向けた支援のあり方について考えたいと思います。プログラムでは、会場も巻き込んだ参加型のトークやグループワークを予定しています。今回のゲストは日本の震災支援をリードしているお二人です。藤沢烈氏(RCF復興支援チーム代表、内閣官房防災ボランティア連携室 室員)、島田悠司氏(Youth for 3.11 代表)をお迎えし、熱い対談をお聞かせいただきます。</p>
北海道大学側の実施責任者	長嶋 沙希
事前申し込み	必要(メールにて、11月16日まで受付)
参加費	学生500円、一般1,000円
問い合わせ先	北海道大学 2年 河東 政道 Tel: 090-2286-4963 E-mail: sycfor3.11[at]gmail.com
URL	<a href="http://syc-3.11.jugem.jp/">http://syc-3.11.jugem.jp/</a>

## 実施報告

本イベントは、2011年3月11日に発生した東日本大震災を受け、札幌を拠点に熱心に復興支援活動を行っている学生たちによって企画・運営されました。今回で3回目となる本イベントは2部形式で実施し、復興支援をめぐる現在の状況や、札幌の学生の活動について紹介した上で、「持続可能な復興支援」のあり方について参加者同士で語り合う時間を持ちました。

大震災から1年8カ月以上が経過し、被災地内外では様々な団体による復興支援が行われています。その中から、現在も大規模な支援活動に携わっている2名のゲストをお招きして、これまでの活動や現在の活動についてうかがい、参加者との語り合いに参加していただきました。

第一部では、東京を拠点にして現地のリサーチなどを行っている藤沢烈様（RCF復興支援チーム代表）と東北への学生派遣を行っている島田悠司様（Youth for 3.11 代表）の講演を実施しました。その中で、普段札幌にいただけでは忘れがちである3.11が残した爪痕や支援活動での体験談に触れ、札幌の学生へ向けたアドバイス等をいただくことができました。

第二部では、ブース形式のグループワークを行いました。直接支援、間接支援、受け入れ型、自分ごと、団体設立、ツアー、ゲスト、Love for TOHOKU といったブースを設け、参加者の方々の興味関心に合ったグループでの議論に加わっていただきました。参加者は中学生から社会人まで約90名にのぼり、「ゲストの方のお話が興味深かった、とても勉強になった」「学生主体の“考える場”がある事はとても良い、刺激になった」という回答が多く寄せられました。

SYC 実行委員会は、今後も定期的にイベントを行い、継続的な・持続可能な復興支援について考える機会を作っていく予定です。



講演の様子



グループワークで議論する参加者



## 地域経済経営ネットワーク研究センター シンポジウム： 地域の多面的な『豊かさ』を目指して ―農業の視点から―



### 行事予定

開催日時	2012年11月22日(木) 12:30 受付、13:30 講演 (終了しました)
主催者	北海道大学 経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター (REBN)
会場	人文・社会科学総合教育研究棟 W103 教室
言語: 日本語 (通訳なし)	対象: 専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	<p>従来の地域産業政策では、その地域(北海道)の経済的な競争上の優位性を武器に、所得上昇という一元的な指標で企業誘致や産業支援を行ってきましたが、本来は住民の多面的な価値観を踏まえた豊かさを最大化することが目的となるべきです。今回は北海道の基幹産業である農業を例にとり、消費者も生産者もそうした豊かさを実現できるような仕組みづくりのために、挑戦的な活動を続けていらっしゃる専門家・実践者を講師にお迎えして議論を深めていきたいと思ひます。</p> 
北海道大学側の実施責任者	地域経済経営ネットワーク研究センター長 町野 和夫
事前申し込み	不要(直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	<p>経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター事務局 塚田 久美子 Tel: 011-706-4066 Fax: 011-706-4066 E-mail: <a href="mailto:sacade[at]econ.hokudai.ac.jp">sacade[at]econ.hokudai.ac.jp</a></p>
URL	<a href="http://rebn.econ.hokudai.ac.jp/">http://rebn.econ.hokudai.ac.jp/</a>

## 実施報告

農産物流通コンサルタントで(株)グッドテーブルズ代表取締役社長の山本謙治氏とフードバレーとかち推進協議会事務局長中尾啓伸氏を招いて当研究センターシンポジウム「地域の多面的『豊かさ』を目指してー農業の視点からー」を開催しました。本行事は昨年度設立した当研究センターが、地域経済に関するテーマを一つ決めて年1回開催するシンポジウムで、今回は第2回目の開催となります。

今年度は上述の統一テーマに沿って、山本氏には「北海道の食は安すぎるー産地がマーケティングに取り組む時代ー」、中尾氏には「“フードバレーとかち”から生まれる『豊かさ』とは」と題した講演をそれぞれ50分ずつしていただきました。休憩後のセッションでは参加者からの質問への回答を中心に、補足説明や講演者同士の議論なども行いました。

山本氏からは、まず食生活の多様化、食慣習の劣化の実態とそれが良質の農産物への需要を減少させていることを説明していただきました。それに対して産地・生産者としては、食育やマーケティングなど様々なチャンネルを通じて消費者に環境、健康、倫理の観点から望ましい食の在り方を訴えていくべきだというのが山本氏の提言です。中尾氏からは、北海道の農業の弱点である付加価値の低さ(加工段階以降は道外で行われることが多い)に対する、十勝地方での高付加価値化への取り組み(フードバレー十勝)をご紹介いただきました。

参加者は、学内44名、学外42名の計86名でした。回収したアンケートからは、ほとんどの方から高い評価が得られました。とくに「食」の観点からの分析が好評で、農業に関心のある社会人からも参考になったとの感想を多く得ました。

当センターでは、自律分散型ネットワークとしての地域経済の実現を目標として掲げていますが、今回のシンポジウムもそのための方法を考える有意義な議論の場となりました。また、農業については北海道の重要な産業でもあり、他の1次産業も含めて今後も引き続き取り組んでいきたい分野です。



講演する「やまけん」こと  
(株)グッドテーブルズ社長 山本謙治氏



講演に熱心に耳を傾ける参加者

## 公開シンポジウム:自然エネルギーを1次産業に活用した地域振興



## 行事予定

開催日時	2012年11月22日(木) 12:30 受付 13:30 開会 (終了しました)
主催者	北方生物圏フィールド科学センター
共催	日本農作業学会
会場	学術交流会館小講堂
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生

## 行事概要

将来における石油資源枯渇や原発災害の体験から安全な自然エネルギー(再生可能エネルギー)への関心は高くなっている。本シンポジウムでは、ローカルなエネルギー資源の利活用による発電、農業生産と地域経済や住環境への波及を議論する。このシンポジウムは北海道総合研究機構と協力して開催する。

## プログラム

1. 北海道農林業における自然エネルギー利活用戦略竹中秀行(道総研・中央農業試験場)
2. 農山村のエネルギー的自立に向けて小林 久(茨城大学農部)
3. 下川町における新エネルギーの創成と利活用について谷 一之(下川町町議会議長)
4. 地域熱エネルギーの直接利用 濱田靖弘(北大工学研究院)
5. 農業施設と自然エネルギー 立松宏一(道総研・総合建築研究所)

北海道大学サステナビリティ・ウィーク2012  
市民公開シンポジウム  
自然エネルギーを1次産業に活用した地域振興

本シンポジウムは、石油資源枯渇や原発災害の体験から安全な自然エネルギー(再生可能エネルギー)への関心が高くなっている。本シンポジウムでは、ローカルなエネルギー資源の利活用による発電、農業生産と地域経済や住環境への波及を議論する。このシンポジウムは北海道総合研究機構と協力して開催する。

開催内容  
1. 北海道農林業における自然エネルギー利活用戦略竹中秀行  
2. 農山村のエネルギー的自立に向けて小林 久  
3. 1次産業における地域熱エネルギーの直接利用  
4. 農業施設と自然エネルギー 立松宏一

日時:11月22日(木)  
受付12:30 シンポジウム13:30~17:00  
会場:北海道大学 学術交流会館小講堂  
参加費:無料

主催:北海道大学サステナビリティ・ウィーク2012実行委員会  
協賛:北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター(田代 浩太郎)  
TEL: 011-746-8441 E-mail: kasei@field.sci.hokudai.ac.jp

お問い合わせ先  
北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター(田代 浩太郎)  
TEL: 011-746-8441 E-mail: kasei@field.sci.hokudai.ac.jp

写真: 自然エネルギーを1次産業に活用した地域振興  
田代 浩太郎(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)  
田代 浩太郎(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)

北海道大学側の実施責任者	荒木 肇 (北方生物圏フィールド科学センター教授)
事前申し込み	不要 (直接会場へお越しください)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 荒木 肇/Hajime ARAKI Tel: 011-706-3645 E-mail: araki[at]fsc.hokudai.ac.jp

## 実施報告

本シンポジウムは日本農作業学会と共催で開催され、化石エネルギーの将来枯渇や原発災害の体験から、安全な自然エネルギー（再生可能エネルギー）への関心は高くなる中、1次産業における自然エネルギーの利活用とそれによる地域活性化について議論しました。

道総研・中央農業試験場・竹中氏は、北海道の1次産業は他府県に比べ、石油依存度が高い実態を報告し、一方、多様なエネルギー資源は多く、これらの複合活用と地域毎の主体的取り組みが肝要とのシンポジウムを解題、問題を提起しました。茨城大学農学部・小林氏は農山村にある未利用エネルギー資源に目を向け、小規模・分散型活用を提案しました。下川町議会・谷氏は、町面積の90%以上が森林であり、木質バイオマスを燃料資源として町内施設や温泉で活用していると報告しました。カーボンオフセット事業展開やヤナギ等のエネルギー作物生産研究も展開されているとのことでした。北大工・濱田氏からは弟子屈町でのヒアリング調査から氷需要を把握し、自然環境での製氷実証を行い、また温泉排湯を活用したメロンやイチゴ栽培が報告されました。道総研・総合建築研究所・立松氏からは自然エネルギーを活用するには、利用場面の建築的な工夫が必要であることや農業施設のエネルギー消費要因を解析した上での、省エネや自然エネルギー導入が必要であると指摘しました。

総合討論では、多様な地域資源に気づくこと、その活用を住民自身が考えることが地域活性化のカギと指摘されました。下川町ではエコポイントアクションとして地域内商品券事業が展開され、石油販売会社も木質資源活用の協同組合に参画して配送事業をしていることや、容積の大きいバイオマスを扱うには土建業が参画している等、地域ぐるみの展開になっている状況が説明されました。人口低減の中で、「下川の資源は木質で、この資源活用に町の将来を託す」議論が新エネルギー活用のきっかけあったと報告され、短時間であったが、地域住民が主人公となったとりくみの重要性が確認されました。



講演の様子



学術交流会館前にて講演者集合写真

## フランス各地域における農業の再生を目指して



## 行事予定

開催日時 2012年11月30日(金) 14:30 受付開始、15:00 開講 (終了しました)

共催 札幌日仏協会/アリアンス・フランセーズ札幌、アンスティチュ・フランセ日本、北海道大学  
農学研究院・工学研究院・国際本部

会場 農学研究院 講義室 N11




言語: フランス語 (日本語への逐次通訳あり)

対象: 専門家・一般市民・大学生・院生

## 行事概要

社会人類学者ジュリアン・ブラン(専門:環境問題及び社会と自然の関係)を招き、ブラン氏が現在取り組んでいる「自然への希求、パリにおける食料と都市の資質:都会人が「農村」を作り直したい時」(パリ市の助成による研究プロジェクト)に関する最新の成果を紹介することによって、今日のパリが持つ都市農業の問題を浮き彫りにします。フランスの都市住民と農村の繋がり、そこから生まれる社会的・経済的な関係性、都市農業の形態や手段とその原動力、都市計画、都市部に農業を導入することによって起こる構造の変化等にも言及する予定です。講演後、質疑応答や意見交換等ができる時間を設け、日仏の状況を比較し、両国の将来を考える上で活発な交流を行う場となるよう願っています。

「フランス各地域におけるの行の再生を目指して」ポスターは  [こちら](#)

本講演は「都市農業」と題し札幌・東京・横浜で行われる討論シリーズの一つです。

討論シリーズのパンフレットは  [こちら](#)

## プログラム

15:00 - 15:15 オープニング (挨拶: 農学研究院 近藤哲也)

16:00 - 16:45 ジュリアン・ブラン氏による講演

- ・フランスの状況
- ・きっかけ、動機
- ・都市と地方の関係
- ・農産物の生産量
- ・都市計画
- ・建築 など

16:45 - 17:35 : 討論 & 質疑応答

17:40: 閉会

事前申し込みは[こちら](#)

(当日会場でも受付を行っております。)

北海道大学側の実施責任者 北海道大学 理事・副学長 本堂武夫

事前申し込み 必要 (ウェブサイトにて、11月29日まで受付)

参加費 不要

問い合わせ先



札幌アリアンス・フランセーズ / ALLIANCE FRANÇAISE DE SAPPORO

マクサンス・ロバン (フランス語) / 平岡 (日本語)

Tel: 011-261-2771 Fax: 011-261-1507

E-mail: bureau[at]afsapporo.jp

または

北海道大学 国際本部 国際連携課

佐藤・柏村

TEL: 011-706-8031 FAX: 011-706-8036

E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp

URL <http://www.afsapporo.jp>

## 実施報告

日本の農業をけん引し、200万人都市・札幌の中心にあって農学を追求している北海道大学は、日仏の農業事情を比較するとともに、両国間の交流を発展させるために、社会人類学者・ジュリアン・ブラン氏（国立自然史博物館博士、フランス国立科学研究センター研究員）を招き、「フランス各地域における農業の再生を目指して」と題する講演会を行いました。講演会は、在日・在札の仏協会と協力し、農学研究院・工学研究院・国際本部の共催で開催されました。環境および社会と自然との関係を研究する社会人類学者・ジュリアン・ブラン氏より、フランスにおける農業の再生をテーマに都市農業を推進する原動力、現状、ならびに都市デザインや建築について講演いただきました。会場は農学・工学研究院の学生のみならず、農業経済、園芸、造園、都市計画、建築などの専門家や、札幌でフランス語を学んでいる方々などがかけつけ、満席となりました。

講演後は、近藤哲也教授（農学研究院）の進行のもと、フランスでの都市農業に関わる具体的な活動内容、地方農業との関係、生産性、法整備、建築など多方面に及ぶ活発な質疑応答が行われました。

本講演会は、札幌日仏協会 / アリانس・フランセーズ札幌からの提案で、本学と同機関が提携する初の試みでした。札幌日仏協会 / アリانس・フランセーズ札幌からは、来年以降も本学と連携しサステナビリティ・ウィークに参加したいという意向をいただいています。同機関との連携により、本学で新たな知の創造の場を創出できるよう考えていきたいと思っています。



ジュリアン・ブラン氏の講演



近藤哲也教授（農学研究院）の進行による質疑応答